

ISSN 0913-0705

# KULIC

23

1989. 11

慶應義塾大学研究・教育情報センター

## 近世大学図書館運営法——アンブrosiana図書館（ミラノ）約定



[Ambrosian Library] Constitutiones collegii, ac bibliothecae Ambrosianae. [Together with:] Additamenta ad primas collegii, ac Ambrosianae Bibliothecae constitutiones. [Milan, Typographia Collegii Ambrosiani, ca. 1630] Follio, pp [6]+ [2 blank]+32; 21+[3 blank]

ルネッサンスの原動力は、当時の時代背景の下で、自由に思索し、感覚の表現に卓越した才能を発揮した優れた学者、科学者、芸術家であった。しかし、彼らを支持し、実質的な援助を与えた人々もまた、この画期的な文化の興隆に重要な役割を果たした。1609年ミラノにアンブrosiana図書館を創設したフェリゴ・ボロメオ枢機卿(1564-1631)もその一人である。同枢機卿は、ボローニャ大学で修辭学、哲学、数学を学んだ近世知識人であり、愛書家であった。愛書家の常として、人知を愛し、書物を蒐集した。ガリレイとの交流を初め、当代の多くの学者と親交があった。

アンブrosianaコレジィは、学術研究を目的とした宗教法人の一種で、学術研究の一層の交流のために図書館が設立された。この図書館は、1602年にトマス・ボードレィによって創設されたボードリアン図書館同様、学問を志す人々に公開されたが、この『約定』はこの図書館の運営綱領である。約定では、その運営に携わる図書館員の責任と権限(資料収集、目録、および法人と契約している学者・研究者への指導)とを定めている。その他に、現代図書館の利用規程に相当する諸規則(開館時間、閲覧者の監督、蔵書管理など)をこの中に含んでいる。

この種の図書館管理・利用規程についての資料は、リチャード・ド・ベリーの『フィロビロン』(KULIC 22号)でも瞥見できるが、公開図書館の諸規程はきわめて稀である。またこの『約定』は、印刷物の性格から、広範に頒布されたものではなく、同法人内での利用に限られていたことも稀観性がそれだけ高い。

(澁川雅俊)

# KULIC 23

## 目 次

### 特集 義塾における21世紀の図書館サービス<I>

- |    |                              |        |
|----|------------------------------|--------|
| 1  | 高度情報化社会を迎える学術図書館             | 小川 治之  |
| 5  | 21世紀の情報サービス                  | 館 田 鶴子 |
| 9  | 大学図書館の今後のすがた                 | 浅井 しのぶ |
| 11 | こんな姿の日吉図書館——21世紀の学習図書館サービス—— |        |
|    | 日吉情報センターハブリック・サービス課有志        |        |

- |    |                      |       |
|----|----------------------|-------|
| 16 | 日吉情報センター所長を経験して      | 吉田 俊郎 |
| 19 | 「わだつみの像」について<ティールーム> | 七戸 克彦 |

### 海外報告

- |    |                               |       |
|----|-------------------------------|-------|
| 20 | UC Berkeley の学生アシスタントに対する教育方法 | 加藤 好郎 |
| 26 | UCLAでの研修を終えて                  | 酒井 明夫 |
| 29 | 「日米大学図書館会議」の意義                | 上田 修一 |

- |    |                    |       |
|----|--------------------|-------|
| 31 | 一郎でこだわる<スタッフルーム>   | 小鷲 武光 |
| 32 | 江戸時代の貨幣            | 白石 克  |
| 38 | 志想, 思想, 視想<ティールーム> | 北洛 師門 |

### KULIC のノウハウ

- |    |                                     |       |
|----|-------------------------------------|-------|
| 39 | 選書情報の活用                             | 市古 健次 |
| 41 | 理工学情報センターの蔵書を作る<br>——理工学部50周年を中心に—— | 森 園 繁 |
| 45 | 利用案内検討会の活動報告                        | 松本 和子 |
| 47 | KULAS 研修報告                          | 安田 博  |

- |    |                       |        |
|----|-----------------------|--------|
| 49 | 目録係って“〇〇”かしら<スタッフルーム> | 石井 真由美 |
| 50 | KULIC の一年             | 国井 佐代子 |

### <資料>

- |    |                     |            |
|----|---------------------|------------|
| 51 | 研究・教育情報センターに関する書誌   |            |
| 51 | スタッフによる論文発表・研究発表    |            |
| 55 | 年次統計要覧<昭和63年度>      |            |
|    | 表紙裏…近世大学図書館運営法      |            |
|    | ——アンブロンアナ図書館(ミラノ)約定 | 澁川 雅俊      |
| 60 | 編集後記                | <表紙> 孫福 弘  |
|    |                     | <カット> 大橋史子 |

# 特集 義塾における21世紀の図書館サービス〈I〉

## 高度情報化社会を迎える

### 学術図書館

小川 治之

(三田情報センター閲覧課長)

#### I. はじめに

かつて理工学情報センターに勤務していた頃、  
‘館(やかた)のなくなった館員(やかたいん)  
は何をすべきであろうか’と真剣に考えたことがある。すでに自然科学の専門図書館として、オンライン文献検索も軌道に乗り始めていたが、研究者は同時に外部の研究機関からも、主として数値情報をオンラインで入手し、自らのデータ・ベースを作り上げていた。一方、科学技術情報の流通分野でも激増する情報に対して、コンパクションの手法の開発や、エレクトロニック・ジャーナル等の開発・実験計画が取り沙汰されていた。

先のことはこうした環境の中で考えていたことである。その後学習図書館の建設という、全く正反対の仕事に従事することになったので、当面の課題ではなくなったが、以来ずーっと頭の隅から離れない課題ではある。

世の中の職業の中で、館にこれだけこだわって仕事をする集団は余りないと言われる程、図書館員にとって館は大きな存在であった。しかし情報化社会と呼ばれるようになって久しい今日、改めて我々の今後の在りようについて考え、その中で一やかたを考えてみることも必要な事であろう。

#### II. 本当に館がなくなるのか

図書館の未来を語った資料は、これまでにかなりある。未だにSFの世界にあるようなものは置くとしても、1945年に発表された情報学の古典とも言われるブッシュの‘Memex’等は、今改めて

見直される機運にある。そこまで遡らないまでもランカスターの‘ペーパーレス・ライブラリー’論は、かなり現実の問題となってきた。それ程現代のコンピュータ技術の発展は、通信技術の発展と相まって、先人の夢を具象化してくれそうである。今後、21世紀を待たずして、高速で、大量な情報を、かつ経済的に運ぶ、高度情報通信システムが、我々の環境を取り囲んでおり、世界中の情報が居ながらにしてパソコン一台で入手可能となっていることであろう。かつての‘館のなくなった館員は…’といった思いは、一段と現実的になってきたように見える。

図書館サービスとは、これまでの知識を含んだ資料と知識を必要とする人とを、その間に立っていかに結び付けるかが究極の目的であり、そのための資料を収集し、整理し、提供してきた。しかし今後は利用者にとって必要とされる情報が、これまでと違って、図書館以外の場所で入手可能となる部分が飛躍的に増加し、又検索の方法も非常に簡便となろう。このことは過去のデータ・ベース数や利用の急増、又最近の傾向として、その内の幾つかがCDの形で広く利用され始めていることから明らかである。

現代の図書館が、サービスに重点を置くようになってきたとは言え、これまで情報の器である資料そのものの管理に時間をとられ過ぎ、その利用についての努力は掛け声ほど充分ではなかった。従って社会的にも、又、親機関ですら、図書館からイメージするものは資料の保存場所であり、情報の提供場所、或は知識のサービス機関であると言う見方への脱皮がなされてきたとは言いがたい。世の中の情報環境がこれ程整ってきた、或はその姿が見えてきた現在、新たな発想のもとに図書館を運営していかなければ、図書館は資料の単なる保存庫となるであろうし、我々も又、書庫の番人に戻ることにたなろう。自然科学系の図書館に至っ

てはその性格上、本当に資料がコンピュータに納まり、更に必要な情報は外部データ・ベースから得ると言う、いわゆる‘紙なし情報システム’が図書館員の介在なしに出来上がって行くことの可能性は充分にある。

勿論こうしたシステムが、誰にでもできるという筈もなく、我々と同様なバックグラウンドを持つ人達が、関連する専門領域の人達と共に‘Information Officer’等の名で、新しい情報システムを構築し、提供することにならう。ペーパーレス・システムの提唱者達も、図書館員は今後も情報の専門家として、より重要な役割を果たすと見なしている。

しかしながら、我々の館の抱えている知識は膨大であり、これを財産として、更に今後の情報環境を上手に取り込んだシステムを作り上げることができたならば、高度情報化社会の中で一段と大きな役割を果たすことができる筈であるし、それが我々の本来求めてきた、学術情報機関としての図書館像であろう。

米国では医科大学を中心に、研究・教育・診療、更には大学経営に必要とされる情報も、統合型学術情報システム (IAIMS: Integrated Academic Information Management System) として一元化し、図書館がその中心的役割を果たすことを前提としたシステムの開発を、国の膨大な援助のもとに進めている。人命を預かる機関として、情報のあり方に対する危機感が高いと言ってしまえばそれまでだが、同じ高等教育・研究機関にとって大変示唆に富むものであるし、将来に向けた学術情報システムは、そこまで踏み込まなければならないのであろう。が、まず将来のこうしたシステム導入へ向けた環境整備として、現在の図書館システムを基盤とした、高度情報化社会にも期待される図書館づくりを進めたいものである。

### Ⅲ. 特色のあるコレクションづくり

これまでの蓄積を生かした新しい情報提供機関

の基本と成るものとは一体何なのか。明らかなのものの一つが、質の高いコレクションづくりである。コレクションづくりは、これまで図書館の最も基本的な政策の一つであるが、学術情報の生産の増加、メディア・利用要求の多様化等により、もはや一大学での対応が難しくなってきた。こうしたことから、特に米国では早くから、‘学術情報資源の共有’と言う立場をとり、相互協力を前提とした蔵書構築を積極的に進めてきたし、コンピュータの支援体制も確実に進められてきた。欧米における‘Book selection’から‘Collection building’へ、そして現在では‘Collection development’、‘Collection management’へという言葉の変遷は、この間の蔵書構築に対する考え方を物語っている。こうした考え方を進めるためには、各々の図書館が、属する大学の研究・教育の理念に沿った、特色ある蔵書を構築することが前提であり、‘コレクション構築のための相互協力に関するガイドライン’が、1983年には米国図書館協会から出版されている。わが国でも学術情報システムを始め、こうしたことを進めて行く上での環境がようやく整ってきたので、今後の大きな課題とならう。

同時に、大学図書館の蔵書は、文化の保存という役割を求められながらも本来、利用との表裏一体のものでなければならず、今後は一層こうした観点に立った考え方を押し進める必要がある。

より良き蔵書構築のためには、基本方針の作成、収集、書庫管理、保全、蔵書分析・評価等、蔵書に関わるあらゆる面に渡る地道な努力が求められるが、これを計画・実行するためには専任のスタッフはもとより、サービス部門を含めた、図書館全ての機能の協力なくして達成はできない。これまでにも散々言われてきた事ではあるが、今後は単なる理念・お勉強に留まることなく、実現に向けた努力をしていかなければ、利用者の支持を得られなくなろう。新時代の図書館の在り方とは、蔵書構築に限らず、まず、学術図書館としての基本理念を再認識し、その原点に立ち戻ること

から始まると思っている。

又同時に、これまでともすれば資料の整理・管理の立場から選書されがちであったが、今後はメディアを問わず、真に研究・教育活動を支えるコレクションづくりを進めなければならないし、情報管理のプロフェッショナルとして、電子メディアを駆使して、図書館論理とニーズとの整合性を持たせた整理・管理が一層求められる。コンピュータ・通信技術の高度利用は、これまでなかなか達成できなかったことをサポートしてくれる手段であり、ここにトータル・システム化への期待があるし、今後はその質が活動の成否を左右しよう。

#### IV. 豊富なサービス・メニュー

‘必要とされる情報を、適確かつ迅速に提供すること’とは、古くから言われてきたレファレンス・ワークの基本的精神である。最後の‘提供’を‘入手’と置き換えるならば、これは単なる我々の標語としてではなく、高度情報化社会の究極のテーマとも言えよう。強いて付け加えるならば、‘居ながらにして’‘経済的に’ということであろう。同時にこの標語は、そのまま利用者からの情報提供機関に対する評価基準ともなる。

■我々はこれまでも、より質の高いサービス提供のための情報入手に努力してきたが、今後はその多くを利用者自身が、図書館員等の援助を得ずして入手可能な時代を迎えている。環境として、情報入手のスタートラインは、利用者との差がなくなりつつあることを意味している。

誰でもが容易に得られる情報は個人が得る時代を迎えて、情報のプロフェッショナルは、より高度、かつ広範な知識と技術が求められる。これまでのレファレンス・ワークが、主として情報の器を中心としたものであり、我々のプロフェッションが、それらを扱っているツールに関する豊富な知識にあるとするなら、その上に更に主題知識そのものが求められ、両方の知識を駆使して、従来の形の情報提供から、情報の分析・加工までも求

められよう。更に、既に専門図書館等でみられるように、要求があってからの提供だけではなく、積極的な情報提供も不可欠となる。利用者にとっての情報の重要さと言うものに、我々は少し麻痺している感があるが、この辺りで利用者にとって必要な情報とは何なのか改めて見直し、ニーズに即した、バラエティーに富んだサービスを開発・提供していく必要がある。ビジネス界で叫ばれてきた‘情報資源マネージメント’の考え方は、先に触れた‘IAIMS’にも大きな影響を与えた。

一方で今後の多様化した情報・情報源の中で、利用者自身が高度情報化社会を生き抜くために、情報の収集・分析といった基本的技術を与えて行くことの重要性も増してきた。これまでのような館の中での利用法を越えた技術や、‘法学情報処理’に見られるような、学問の中に入り込んだ指導も更に必要であるし、コンピュータ・システムでの‘gate way’機能に当たる指導も一段と強化されなくてはならない。

こうしたことは、従来のレファレンス・ワークをより多様に、より深くしたものとするなら、新たに必要とされるものとして、利用者が図書館を始めとする様々な情報源から得る膨大な情報を、如何に効率よくパーソナル・ファイルとして蓄積させていくか等、情報管理そのものの技術の提供等も求められよう。‘情報検索’なる訳語は、正しくは‘Information Storage and Retrieval’であり、効率の良い検索のための蓄積の方法が重要であることは、何もパソコンを使わずしても、日頃悩まされていることである。が、コンピュータ時代はその性格上特に重要であるし、本来我々の最も得意とすべきものの一つである。

情報提供機能の充実は今後の高度情報化社会にあって、図書館を資料の単なる保存庫だけに終わらせるのか、これを武器として真の学術情報機関への脱皮が図れるのかの、鍵を握っていると言えよう。

## V. 情報専門家としての図書館員

今までに今後の高度情報化社会に対して、どの様に対応したらよいかについて、その財産として蔵書構築と、サービス機能の充実を中心に述べてきた。しかしながら、こうした新しい図書館像を作り上げて行くのは、言うまでもなく図書館員自身であり、その実現のためには現在のスタッフの技術の一段の向上と共に、バックグラウンドの異なる知識・技術を持った図書館員の養成も必要となる。‘組織が利用できる最大の資源は、技術ではなく、人間である’とは、ドラッカーの言葉であったか。いつの時代でも求められることではあるが、変革期には特に擁するスタッフの資質に、今後の全てが掛っている。優れた人材の確保と、適正な人員配置、計画的な研修は、一段と重みを増すことになる。

従来情報を入れている器、物に重点が置かれ、その内容に対する対応まで手が回らなかった点を考えるならば、主題専門家養成への努力が求められよう。米国流の‘bibliographer’とも言える職種であり、今や修士以上の主題に対する知識が必要とされよう。しかし、学の分散・統合が一段と進む今日、必ずしもより深い知識が必要と言うよりは、一つの主題に対する研究方法をマスターしていることの意味の方が、より重要と思われる。幸い義塾には情報専門家養成機関があり、これまでは主として図書館・情報学のより高度な技術習得を目的として職員を派遣してきたが、今後は主題を持ったスタッフの教育の場としての活用が増えよう。彼らは、図書館・情報学も修めた主題専門家として、選書、目録、レファレンス等の広い分野で研究活動の良きパートナーとなろう。

一方、急速な技術革新が図書館に及ぼす影響の大きさを考えた場合、常にこれら技術の評価・導入の妥当性について検討し、システム化するグループの存在は、より高度で多様なサービス提供の環境づくりに不可欠であるばかりか、今後の我々の活動を左右するものである。彼らは更に深いコンピュータ・通信技術や、図書館・情報学のバック

グラウンドのもとに、熟練した現場のスタッフと共に、図書館のR&D部門を構成する。

又、今後の図書館経営に携わるスタッフは、こうした専門集団を主たる構成員として、変化の激しい環境の中であって、より広い視野からの中・長期計画を立案し、義塾当局・学部の理解のもとにその実現に向けて努力することになる。このためには、図書館・情報学や、高等教育への深い理解はもとより、経営学等の広い知識を必要とされるが、その養成も大きな課題である。

こうした様々な知識・技術を持ったスタッフが、各々の役割を分担・協力し、かつ鏡い合って初めて新たな時代に向けた図書館づくりが可能となる。

## VI. おわりに

これまでも未来の図書館論は、電子図書館とかペーパーレス・ライブラリー等の呼び方で発表され、高度なコンピュータ・通信システムに支えられた図書館像が示されてきた。そして、これらのが現実味を帯びてきた今日、次の世紀まであと僅かといったきっかけも得て、現場レベルでも21世紀の図書館のあり方をテーマとした研究会や論文が目につくようになってきた。今回の特集もそれに当たるものだが、今後益々盛んになり、我々の寄って立つところを真剣に論議して欲しいものである。21世紀論を論ずる場合、高度情報化社会論を避けて通れないことは明らかである。館種によっては本当に館を持たない図書館も生まれることであろう。大学図書館にあっても、こうした影響を大きく受けざるをえない。大学のサヴァイバル戦争の一環として、モダンな図書館や食堂づくりが進められ、キャンパス活性化に貢献していることは事実であるが、しかし大学図書館が、名実ともに高等教育機関の中心的役割を果たすためには、館を越えた、より機能を重視した機関への脱皮を図る必要がある。いずれを取り上げても‘言うは易し…’ではあるが、幸い義塾図書館は世に先駆けて、器と機能とを組織上でも分けて活動

してきた。それが情報センター構想であり、発足以来既に20年近くを経てきた実績を持つ。これまでの努力に対する評価を含め、この理念を本当に根付かせることができるのか、理念倒れに終わらせるのかは、本当は今後の我々の対応如何にかかっているのだと、痛感させられる時代を迎えている。

#### 参考文献

- F.W.ランカスター著 植村俊亮訳『紙なし情報システム』共立出版, 1984.  
 野添篤毅 医学図書館と統合型学術情報システム I AIMS. 医学図書館 34:190-200, 1987.  
 田屋裕之『電子メディアと図書館』勁草書房, 1989.

## 21世紀の情報サービス

館 田鶴子

(医学情報センター  
資料サービス担当係主任)

### I. あるシナリオ

午前2時, Mary Smith はひどく具合が悪いのに気づき夫を起こした。夫は彼女の様子を見て、直ちにホームドクターの Dr. Green へ電話をかける。Dr. Green は Mary を大学病院へいち早く連れていくように夫に指示する。それと同時に彼の診療所のマイクロコンピュータの電源を入れる。マイクロコンピュータにつながる通信回線を経て、病院の救急部へ Mary がまもなく到着することを知らせる。

続けて彼は、Mary の診療記録を過去に遡って注意深く見なおし、既往症、ここ数か月間の処方薬、他の関連データを得る。得られた情報のなかから最も重要なデータと、最初に行なうべき検査への助言を病院救急部へ伝送する。

午前5時, Mary は90分以上かかって救急部へ到着した。完全に自動化された臨床検査室で広範な検査が行なわれ、その結果は救急部へ電子的に

転送され、かつ Mary の診療記録も電子的に結びついた。撮影されたX線写真のうち1枚から異常が発見されたため、放射線診断専門医に相談する必要があった。ケーブルテレビのネットワークを通じて、X線写真を病院から放射線診断医の自宅へ伝送し、診断結果はただちに病院へ返送された。その間、Mary のすべての検査結果が出て、そのうち異常値はマークされた。救急部の医師は診断支援システムに向かった。

Mary の病態には何か重大な異常が疑われたので、Dr. Green は彼女の病気についてさらに詳しく調査することにした。救急部の端末機で paper-chase を呼び出し、医療センター図書館の文献を検索した。彼は関連した知識ベース (knowledge-bases) も検索した。図書館蔵書の大部分はビデオディスクか光ディスクで入手できる。医療センターのコンピュータはテレビのネットワークとつながっているため、図書館の蔵書には1日中いつでもアクセスできる。

Dr. Green は Mary と似た症状の患者から特定の検査値のパターンを見たいと申し出た。大学病院では検査結果はコンピュータ処理され、かつ患者の機密は守られている。Mary の検査結果は、地域の他の病院の患者の検査値とも比較された。これらの結果はプリントされて、知識ベースから得られた情報に照らしてチェックされた。

まれなケースではあるが、Mary のこの症例に関する主要データ (診断名、検査結果、文献データ) は感染症センターへ電子的通信ネットワークを通じて送られた。

Mary の症例は大変興味深く研究価値のあるものであり、医学部の研究プロファイルのなかで注目される。Dr. Green は血液病学、腫瘍学、内分泌学、薬理学、薬物中毒情報センターの研究者たちに、この症例をコンピュータを使って知らせる。各研究者は診療所や研究所に出掛けると電子メールボックスにメッセージが届いていることを知らせるサインに気づく。メッセージのひとつは、Mary の症例であり、彼女のベッド番号と検



査値が大雑把にわかる。彼らはやはり paper-chase を通じて文献へアクセスする。

Dr. Green は24時間動いている LINC (Library Information Network Center) のプログラムを使って Mary について調べることができる。そこからは臨床医学図書館員 (clinical medical librarian) が行なうのと同様のサービスが電子的に受けられる。一方、図書館スタッフは開館と同時に電子メールにメッセージが届いているサインを見て、Mary の症例について調べ始める。臨床医学図書館員の仕事は、地域的に孤立した診療所や開業医への“遠隔”プログラム、地域医学図書館への援助を含んでいる。彼らは近くの図書館へ行くか、電話を受けた図書館員が代行するかして、LINC を電話で呼び出し、医療センターの情報システムへアクセスする。

午前10時、Mary は、大学病院に入院、隔離された。感染の危険を避けるため、病院スタッフのみが入室できるように、コンピュータ分析によるハンド・プリントでそこへの出入りはチェックされる。Mary の検査結果は診療記録と一体化し、すべての研究者、図書館、感染症センターはそのデータを知らされている。図書館スタッフは、データベースの網羅的な検索を行ない、引用文献名のみではなく論文中の重要箇所も探しだす。Mary のレコードにアクセスする者は誰でもこの文献情報を得られる。これと同時に Mary は、体の各機能を電子的にモニターされている。

Mary の家族は彼女の症状を大変気にしたため、Dr. Green は図書館に、血液病学、救急部、病院に関する基礎的な情報を彼らに与えるように申し出た。また、Mary 自身にもまず、病院の診療をよく理解してもらえるように基本的な情報を提供すべきと考えて、図書館からケーブルテレビを通じて Mary の部屋へ情報は伝送された。

以上は、Mary Smith という架空の患者の発病から入院までを描いたシナリオである<sup>1)</sup>。これは Matheson report<sup>2)</sup> を受けて描かれたものであり、著者は、将来の医療はこのような情報環境の

なかで行なわれるだろう、またそうなるべきであると信じて、医学図書館はそれに対応した将来の計画をたてて実行していこうと述べている。

医学・医療情報に携わる医学図書館員が、このシナリオに描かれたように診療、研究、教育、地域社会への援助をトータルに達成するためには、まだ課題が多い。しかし、目標に向かって少しずつでも前進できるように、将来の医学情報センターそして義塾の図書館はこうなっていきたいと思うことを思いつくままに述べることにする。

## II. 図書館を支える人々

今日の学術情報は発生と同時にあるいは印刷段階で大部分がコンピュータ処理され、それがいずれ書誌やフルテキストのデータベースの形で、迅速かつ多角的にアクセスできるように加工される。従来、大学図書館は既存の書誌ユーティリティや外部データベースの一利用者であることが多かったが、最近では自館の全蔵書のデータベース化やローカルライブラリーシステムの構築に携わり、情報の処理・加工に深く関わっている。MEDLINE や SCISEARCH のテープをローカルオンラインシステムへ部分的に取り込み、OPAC と共に24時間サービスする時代が来ている。

しかし、わが国においては一部の大学を除いてこのような技術の進展に、マンパワー、予算のいずれも十分に追いついていない。このジレンマを脱却していち早く新しい局面を見出したい。そのためにも、コンピュータの専門家を図書館スタッフとして迎えるか、あるいは現在のスタッフをもう少し余裕をもって育てることによって、より強力なシステム開発部門を作ることが是非、今後の図書館にとって必要であろう。

その結果構築された装置をいかに有効に使うか、これは伝統的な図書館サービスと本質的に何ら変わらないだろう。ある程度主題に精通し、書誌情報や分類・索引システムを理解している広義の情報専門家として、我々図書館員は、新しく構築されたシステム環境においても、新しいメディ

アと利用者を結ぶパイプ役であり続けるだろうし、従来は不可能だったこともコンピュータの情報処理能力に助けられて新しいサービスとして展開できよう。

図書館サービスの展開に見られるひとつの例として、たとえば個人のデータベースを構築し検索することへの援助、エンドユーザー向けの検索支援ソフトウェアの開発などがあるが、ここでも我々図書館員とコンピュータの専門家が協力する事で、より有効に利用者をバックアップできるだろう。

これ以外にも、特に自然科学分野においては、主題専門家を、また一般的にはメディア専門家や翻訳のリバイザーを置くことができれば図書館サービスは質的に格段と向上するはずである。しかし、将来的には各種の市販ソフトウェアが現在のワープロソフトのように一般化し低価格になれば、既製品でもある程度賄える仕事に専門スタッフを置くことは贅沢となるかもしれない。

図書館はこのように情報サービスを重視して高度に専門的な集団となる一方で、我々スタッフは機械化された単純労働もこなさなければならぬ。この二極分化は避けられない事実である。

### Ⅲ. 形を成さないものへの支出

たとえば、MEDLINE を例にあげれば、冊子体の Index Medicus、商業ベースのオンライン検索、CD-ROM、そしてローカルオンラインシステムにロードされた Mini-MEDLINE というように、ひとつの索引システムが複数の媒体によって同時に提供されている。近い将来を考えれば、わが国ではオンライン検索と CD-ROM が主流となるだろう。しかし、冊子体の Index Medicus はそれを選ぶ利用者がある限り講読を中止できない。なぜなら、図書館はより広範な選択肢を用意し、利用者の好む媒体で、自由に情報源にアクセスできるようにすることが理想だからであり、そのために求められるあらゆる要求に、我々はその限り答えていきたい。

以上のような多様な情報アクセス手段を提供するために、また、パーソナルコンピュータなしでは研究が進まない時代に、研究・教育環境を整備するためにも、現時点ではスペース上の制約が大きいのが、将来は必要なハードウェア、ソフトウェアへの積極的な予算措置が望まれる。そのためには、図書館サービスの意義を訴え、理解してもらえるように努力することも我々の責任だろう。そして従来の物中心の図書予算のあり方を見直し、形を成さないものへの支出に対して積極的にならない限り、今後図書館サービスの発展は望めない。そればかりか情報の入手は図書館抜きでより効果的に効率よく行なわれることになりかねない。書誌情報がエンドユーザー用にフロッピーディスクで販売される時代だから、なおさらである。

一方、図書館予算で賄えない部分は、受益者負担の原則によって、より高度な、あるいは肌理の細かいサービスを展開することになるだろう。

### Ⅳ. 利用者と情報源を結ぶ懸け橋

情報媒体が多様化するほど、それぞれの媒体に即したアクセス法を利用指導しなければならなくなる。従来、冊子体の索引誌・抄録誌は図書館に置くだけでも利用者はある程度ブラウジングで目的とする文献を探すことができた。しかし、CD-ROM やオンライン検索では、中身はブラックボックスとなり、最初にきちんとした利用指導を行なう必要がある。情報サービスに占める利用教育の比重は高まりそうである。

CD-ROM はコンピュータによる検索を知るにはちょうどよい教育効果がある。その段階で、索引法、シソーラスなどについて覚えれば、いずれオンライン検索の賢いエンドユーザーへと無理なく移行していこう。図書館員は彼らに対して、検索媒体に依らず、効率よい検索法や検索戦略をアドバイスできるように益々多くの知識が求められよう。

しかしながら、CD-ROM の導入、オンライン

検索のエンドユーザー数の増加から、レファレンス窓口でのオンライン検索の件数が減少すれば、代行による図書館員の検索経験も減ることになり、常に最新の知識を求める努力は今まで以上に意識的に行なう必要がある。

情報への効果的なアクセス法をマスターした利用者は、より簡単で時間が節約できるデータベースの検索に頼るようになり、その時CD-ROMは従来の冊子体二次資料にとってかわることになるだろう。

さらに情報サービスは先のシナリオにも描かれているように、LAN やケーブルテレビのネットワークを通じて場所の制約から開放され、図書館へ出向かなくても情報源へアクセスできるようになる。研究者同士は電子メールを利用して、電話よりも煩わしくなく双方向の会話が行なえる。

従来図書館で行なってきたSDI サービスや目次速報サービスは、今後は研究者自らが各自の端末上で検索するか、あるいはLANを通して図書館から定期的に伝送するようになるだろう。このサービスに付随して、必要な原文献の提供まで、量によってはサポートできるかもしれない。

情報源もローカルなものから、国レベルの総合目録、国際的なデータベースまで幅広くアクセスできるようになるため、どのチャンネルを使ってどんな情報が得られるのかを案内することが、今後一層求められよう。情報が簡単に、しかし複雑なチャンネルから入手されれば、次にはそれを評価することが必要となるだろう。こういった仕事がかつからの図書館サービスの方向性かと思われる。

そして将来、経済的にも使用に耐えるフルテキストデータベースとその有効な検索法が活発に利用されるようになれば、二次情報の存在理由は薄くなり、文献コピーの必要性もなくなる。そのことは今まで図書館が行なってきたサービスに大きな変化が訪れることを意味する。しかし、図書館員は日々変化する情報源を追いかけ、それへのアクセス方法を利用指導し、情報源と利用者の橋渡

しをする存在として、変わらず努力を続けることだろう。

将来の図書館は、様々な媒体より構成された“蔵書”を収集、加工、維持すると同時に、内部、外部を問わず、情報源へのアクセス手段をより広範に提供するものとなるだろう。我々は、利用者に居心地のよい情報環境を、欲をいえば思索環境をも与え続けていきたい。

#### 引用・参考文献

- 1) Lorenzi, N.M.: Making a dream come true: strategies for medical school libraries. *Bull. Med. Libr. Assoc.*, 1983, 71 (4): 410-414.
- 2) Matheson, N.W., Cooper J.A.: Academic information in the academic health sciences center: roles for the library in information management. *J. Med. Educ.*, 1982, 57 (10, pt.2): 1-93.



## 大学図書館の今後のすがた

浅井 しのぶ

(三田情報センター閲覧課)

### I. はじめに

“大学図書館は大学における研究と教育を支援する組織である。”<sup>1)</sup>とすれば大学における研究と教育が変われば、大学図書館も変化することになる。では、21世紀の大学はどうなっているのだろうか。1世紀のスパンは100年あるが、今から100年以上先のことを見通すことは未来学者といえども無理である。従って、近未来“2001年”ぐらいの世界を想像してみたい。

2001年は、現在小学1年生ぐらいの子供が大学に入学する時代である。筆者の小学校時代の教育と現在の教育は、40～50名からなる1つのクラスに担任の先生が一人いて、時間割にそって授業を行うという形式は変わっていない。ただ最近では生徒に端末を使わせ、算数の計算などを行わせるという話を聞くが、大きく変わったと言えば、この教育のメディアであろう。つまり、コンピュータを核とする機械化が教育現場にも多くの影響を及ぼしていると言われている。現に筆者の小学校時代には、まだ電子計算機も複写機も普及していなかった。エキスパートシステムはもとより今後ともコンピュータ技術の進展はゴールを知らないであろうし、<sup>2)</sup> コンピュータが初等教育に与える影響は大きいと思われる。

大学においても同じことが言えるだろう。既に事務の機械化は進んでおり、義塾においても塾生のデータはコンピュータにより管理されている。

### II. 技術革新と大学図書館

それでは図書館における機械化はどうであろうか。三田情報センターでは昭和60年秋に図書の出返却システムの機械化を開始している。ハウス

キーピングシステムの中でもこの貸出システムは最も機械化が進んでおり、<sup>3)</sup> このシステムによってカウンター業務の迅速化が図られたのは事実である。

目録部門においては、昭和61年に学術情報センター目録システムに、昭和63年にはOCLCに接続しカードの打ち出しを行っている。更に現在はオンラインによる蔵書目録データベースサービス(OPAC)を計画中であり、カード目録が図書館から消える日もそう遠くはないと思われる。書誌ユーティリティに関しては、オンラインによる目録情報の国際的な交換を目的とした、各国の全国書誌作成機関の参加による国際MARCネットワークの計画が進められる<sup>4)</sup> など、国際的規模でのネットワーク化がすでに始まっている。

データベースのオンライン検索システムも既に導入され、サービスを行っている。日本の大学では経費面で自由に使えるところはまだ少ない<sup>5)</sup> ようだが、アメリカでは盛んに利用されていると聞く。三田情報センターではここ数年間で何種類かのデータベースを導入したが、今後情報量の増大に伴い利用も増えていこう。情報検索サービスの比較的新しい動きとして、国際的な分散データベースシステムの構築計画、原論文のオンライン注文、全文データベースのサービスなどが挙げられる。全文データベースは論文の全内容を収録したデータベースであり、これまで二次情報しか得られなかったシステムを通して、雑誌その他の出版物の全文が手に入るようになったことは、情報流通の方法に影響を与えるはずである。<sup>6)</sup>

また現在大きく注目されているメディアとして電子出版が挙げられる。電子出版は広義では光ディスク、CD-ROM、CATVなども含まれるそうだが一般的には電子的あるいは光学的にデジタル信号として記録された情報を、電子媒体により出版するか、あるいは通信回線を介して、オンラインでアクセスする形態の「出版物」であろう。<sup>7)</sup> 今後電子出版は増えていくと思われるし、それに伴い図書館から本が減っていくのは必須で

あろう。さらには図書の検索、資料の取出し、必要な部分の入手までのすべてが電子化される電子図書館も誕生しつつあると言われている。

湘南藤沢の新図書館は現在計画の段階で、その全容については不案内であるが、かなり電子化された図書館になるのではないだろうか。

### Ⅲ. 研究・教育・診療の今後

上述したように教育のメディアは今後コンピュータ技術の発展に伴い変わっていくだろうが教育の方法はどうであろうか。大学の授業の多くは教室で先生が学生を相手に講義を行うという形式を取っている。予備校などでは教室にはいれなかった生徒のためにテレビ授業を行うという話を聞いたことがあるが、大学ではどうであろうか。少なくとも慶應義塾ではそういった授業を行っていないし、今後もテレビ授業などは行われず、ゼミ単位などの少人数制の授業が増えていくだろう。

その理由を塾長の言葉を借りて述べてみたい。塾長は学生生活を充実させるためには三つのことが必要であると述べている。一つはよき師を得ること、二つ目はよき友を得ること。先生との交わりは知的財産をふやしていくということだけでなく、人間形成の上にも大きな役割を果たすものである。このことは友人を得るにも通じるもので、お互いが青春の一時期に心を打ち開けあって話し合える友達を持つことが、人生をどのくらい豊かにしてくれるか計り知れないものがある。三つ目は書籍を読むことである。現在は映像文化の時代に入ってきているが、そういう時代であればあるほどよい書物に親しんでほしい。<sup>4)</sup>

大学は学問をする場所ではあるが、人や書物との触れ合いも大切な教育の一環である。もしそこでテレビ画面を通しての授業が行われたら先生との交流がなくなってしまう。授業やゼミが終わった後に先生や友人とお茶を飲みながら語り合う、又はお酒を飲みに行くといった事が、実は大学の教育において大切なことなのであろう。とかく個人のプライバシーが叫ばれ、個人の生活中心の風

潮が高まる中で、今後人との交流はますます大切になっていくと思われ、その点において教育の本質は変わらないと筆者は考える。

塾長は書物の重要性を述べているが、先程本という形を取ったものは今後減少していくだろうということについて触れた。果たしてこの世から本が消えてしまう日はくるのだろうか。知識の伝達を目的とした書物は今後電算化されると思われるが、詩集や美術書など紙という媒体を通して感性に訴える書物に関しては、今後もそのままの形体を維持するであろう。書物がある限り、図書館の役割は大きく変化しないのではないだろうか。

### Ⅳ. おわりに

図書館業務の大半は機械化され、利用者にとってもコンピュータ端末との触れ合いの場は増えるだろう。図書館資料もいわゆる機械可読形式のものが増加するだろう。特に自然科学系や保健科学のように情報が生命の科学ではそうだろう。経済、法学のような自然科学的手法を採用している科学もコンピュータの恩恵を多大に受ける。国文学資料館に見られるように、人文科学系でもコンピュータ化は避けられないだろう。

しかし、冒頭で述べたように大学教育の本質というものは大学誕生以来今日まで、又今後も大きく変化するとは思われない。とすれば大学図書館の持つ根源的な機能も大きく影響を受けるとは思われない。従って、科学技術の変化に柔軟に対応しつつ、21世紀に向けて研究・教育・診療のための“心臓”たらんことを心がけるべきであろう。そして、その姿とは上で述べた通りのことである。

#### 引用・参考文献

- 1) 高鳥正夫 “大学図書館の運営” 図書館・情報学シリーズ7, 勤草書房 1985 p.4
- 2) NHK取材班編 “明日のコンピューターに何を求めるのか 未来のコンピューター戦略” コンピューターが世界を変える3 角川書店 1988.
- 3) 原田勝 “未来の図書館” 松籟社 1987.
- 4) 石川忠雄 “大学入学式式辞” 慶應義塾報1402号(臨時号) p.1-4 1989.

## こんな姿の日吉図書館

—21世紀の学習図書館サービス—

日吉情報センター

パブリック・サービス課有志

三木 いづみ（執筆担当）

酒井裕美子 太田 香保

柳 晴美 青柳 由美

狩野 わこ 木下 和彦



標記のテーマについて、日吉図書館パブリック・サービス課では若手職員によるディスカッションを行った。21世紀と一口に言っても10年後から110年後までの幅を持つが、このディスカッションでは次の世代としてより身近な21世紀を念頭に、現在からのステップ・アップが語られている。21世紀とはどんな時代か、図書館、利用者がどうなっているか、図書館員に何が望まれるか、何ができるかに焦点を当てて以下に採録する。

### I. 利用者像

21世紀と聞くと遠い未来の輝かしい姿を一瞬想像するけれど、実はたった10年後なんですよね。10年後の大学生はどんな子でしょうか？ パソコンに堪能で、人に話し掛けることの少ない子。そういう子にとって図書館員は邪魔。

監視人に戻ってしまう？うるさいのを注意するだけ。

くら～い！

私はもっと肯定的に考えている。知的好奇心旺盛で、文字だけの利用でなく、音声にも画像にも積極的にアプローチする子供たちのイメージ。

それに18歳で入学してくる学生だけとは限りません。御存知の通り、今生まれてくる子供が減り、18歳で大学に入学してくる学生数が減る。一方で高齢化、高度技術化、労働時間短縮による余暇時間の増大のために、継続をして勉強したいという要求は確実に増える。いわゆる生涯教育の必要性は今以上に高くなると思います。学生の年齢層が広がり、興味の対象も広がるでしょう。

国際化も浸透していくだろうから、留学生や日本在住の外国人も増えていると思う。民族の多様化。異なる文化背景を持つ人達に今のままの図書館サービスでは対応しきれない。様々な言語の利用者を想定したサービスを考える必要があると思う。

図書館員の資質にはもっと高いものが求められる。一般的な手続き類は今より簡単にできるようになる。その余力を生かしてその先に何をやってあげられるか。

ウォークマンをしてパソコンに向かう世代がいても、様々な言語習慣の人が来ても、柔軟に対応できるように有りたいですね。利用者とのつながりは常に積極的に保っていたい。

紙と人は絶対に無くならない。人的援助は不可欠です。

### II. 図書館サービス

#### 1. 図書館の施設

21世紀に向けてサービスの域も広げたい。世の中の変化にあわせてサービスも変わっていくだろうし。ワープロやラップトップのパソコンを使える部屋なんかあっても良いと思う。

グループ学習室の利用だってあんなに多いんだから、もっとスペースを増やしてはどうかしら。一方で落ち着いて利用できる静かな環境も用意したい。

バック・グラウンド・ミュージックの流れる部屋。ここはクラシック、ここはポピュラーと幾つか用意するなんてどう？

それなら飲食のためのラウンジも欲しい。あちこちで飲食しているのを怒って回るだけでは解決しないでしょう。そのための場所を設定しても良いと思う。

## 2. 図書館のルール

飲食禁止というルールを変えるっていうのは、今の私達にとっては大きな発想の転換ね。

ルールに関してはいろいろ感じていることがあるけれど、存在するからには従わなければならない。自分の判断で勝手に裁量するわけにはいかないと思います。

利用者が不信任を持ちますね。必ずしも良いルールでなくても、悪法も法なのだから、有るからには従うべきでしょうね。

その代わり、現存のルールに支配されず、世の中の動きに敏感に、いつも何故?という気持ちを持っていたい。現状がそうならそれにあわせてルールを見直す。

それでは、貸出・返却についてうまい発想の転換はないかしら。貸出期限は無くして自分で決めるとか。予約の付いた時だけ督促するようにして。

でもブラウジングの利用もあるのだからそれはできない。

冊数制限はどうだろう。冊数制限の無い図書館が多いアメリカの例を見ても書架に本が無くなる事は考えにくいし。返却本の配架、セルフフリーディングが大変かもしれないけど。

とにかく利用者をもっと信頼して、自主的に自由に図書館を使ってもらいたい。もっと自由なルールを。

## 3. 図書館の公開

先程、生涯教育の話が出たけれど、今まで以上に、大学に所属していない人の情報要求も増えるでしょうね。一般公開についてはどう思いますか?

現在は日吉は学習図書館であるから、特に日吉にしかない資料の利用はあり得ないという理由で一般の人の入館を断っていますが、これか

らは学習図書館だからこそ生涯教育に貢献できるのではないかしら。

席だけを利用する学生より、本当に勉強したい一般の人をいれたい。

でもいろいろな人がいるからね。

利用料を貰うとか、そこにしかない資料と限定するとか、やっぱりルールが必要になってくるのかな。

しめつけるルールでは悪い人ばかり目につくし、私達もストレスがたまっちゃう。

利用者も私達も気持ち良く利用できるルールが一番ですね。

## 4. 21世紀の情報提供サービス

情報量があまりに増大していくとその中から適切なものを選別するための方法を提供しなければならない。書名・著者名といった書誌情報だけでなく、目次や著者の略歴といった付加価値をつけて提供したい。

書誌情報のデータベースと付加情報のデータベースを作ってリンクさせるとか、コンピュータをうまく利用できれば夢でもないはず。

国際化により外国人の利用が増えることに対しても対応しないといけないと思うのだけど、OPACの端末に自動翻訳機能があったらどうかしら。英語で入力して日本語の本が探せるとか、日本語の本の内容のアブストラクトが探せるようになると面白いわね。

あと可能になるものとしては、ドキュメント・デリバリー。家に居ながらにして検索できるだけでなく、フルテキストの資料を入手できるサービスです。利用者が図書館に来なくなると寂しいかもしれないけど。

## 5. コンピュータやビデオを利用した

### 利用指導プログラム

様々なサービスを知ってもらい、利用してもらうには、その存在を知らせなければいけないのよね。広報にしても次世代の子供向けに視覚メディアを使ってもっと自由にしたい。

図書館そのものについての認識をもっと広げ

たい。そのための図書館教育が小・中学校から必要でしょう。

大学自体も図書館とタイアップしていない。勉強しなくても卒業できるなんて。

学生も図書館を理解していないけれど、教える側の先生も同じだと思う。図書館の必要性をまず先生にアピールしなければいけないと思う。新入生のためのオリエンテーションも先生にもっと強調したい。

方法も今は集団を対象にしているけれど、パソコン世代に対しては、パソコンとビデオを使った個別の利用指導を検討する。

そうして利用者の図書館に対する意識の向上が図書館への要求の質の向上につながり、図書館員の質の向上を促すわけですね。

### Ⅲ. 図書館員の資質

#### 1. 情報の選別力

これからの図書館員に期待されるものとして、情報の選別力があげられると思います。いいものと悪いもの、本当に役に立つ情報、役に立たない情報を見分けることが必要でしょう。本物を見る目というか…。

信頼出来る情報をどうやってみつけるか。情報が多ければ多いほど、選別できて、利用者に合うものを推薦できないといけないんですよね。

今はオンライン検索とかいって何でもかんでも集められることに“わーすごい”と思うけど、集めた情報を疑ったり、評価する能力、自分に必要なものを集める力が必要になる。

小学校にもパソコンの授業を、なんて文部省が言っているけれど、使い方、技術の教育はできて、それを使ってどうするかが問題。本だって「文字が読める」だけでなく、理解ができなければ。それを手助けするのが図書館員の役目です。

#### 2. 主題知識

主題知識云々を言う時、日吉はどうなるのだ

ろうか。学習図書館という手前、やはり広く浅くになるのかな。

何でも知っていることは必要ですね。学生からみるとやはり図書館員は何でもできるというイメージがあるし。

それってありますね。何か聞かれた時に、「それ何ですか」というのと、「あ、ナニナニの事です」いうのでは全然反応が違いますからね。

そう、意外と主題知識はいらなないかもしれない。利用者の要求はどんどん専門化していった、それに対応して主題知識を付けようとしても無理でしょう。広く浅く教養を身に付け、検索のノウハウを会得する。実際に知識に基づいて検索をするのは利用者で、我々はその手助けをする。ノウハウを伝えればいいのではないのでしょうか。

そういうのも必要だけど、やはりプラスαで何か少なくとも一つ主題知識が欲しいなと思う。

それは雑誌選定のミーティングをした時に切実に感じられた。雑誌の中で何が学部生のレベルに合うかという判断をするためにはその主題知識がないとできないよね。その辺は経験から得た知識でかろうじて補ってはいますけれど。

アカデミックな分野じゃなくてもいいじゃない。音楽や映画だっていいと思う。得意な分野を持っているというのは大切なことよ。

対利用者だけでなく、資料選択の面でも。

そうそう。実際、ウィークリー出版情報で選書する時だって、それぞれの好きな分野なら自信を持ってチェックしているでしょう。

この著者なら間違いが無い、とか。

そうすると一般教養の図書館というのは、各々いろいろな分野に興味のある人が図書館員として集まっているといいのかな。

主題知識といえば、先日ある人が、慶應の図書館より早稲田の図書館の方が良いと新聞で言



っていた。法学部、文学部、政経学部といった各学部の学生が司書コースをとっていて、そういう人が図書館員として入ってくる。慶應の場合は、図書館情報学の知識のレベルが高いから、主題に関する検索でも、時間はかかっても一定のレベル以上の結果を得られる、とは言われるけど…やはりサブジェクトスペシャリストを養成することは必要でしょうね。

### 3. 図書館員の養成

大学の図書館教育の授業でひとつ専門性を持たせることはできないかしら。

現状では、教養課程でいくつかの科目をとる程度ですね。そこから何か自分の興味をみつけて、広げてみようとするれば少しはつながっていくと思います。

図書館情報学を大学でやるのには無理があるような気がする。何かあいたが抜けてるような。専門が無くていきなり図書館学を学んでいる事に問題がある。

資料論にしても、学問分野のちゃんとした方法論を教えていけばいいのよね。どういう成り立ちか、とかどういう研究方法をとっているからこういう二次資料があるとか。

「国書総目録」にしたって、日吉図書館で国文学資料の探し方のセミナーを担当して初めてなぜそんな本が存在するのかわかった。

そうすると図書館員というものもどんどん細分化して行って、この人は人文、この人は理工、という風になっていくの？

やはり基礎になる部分は図書館情報学の一定のレベルの知識が必要で、深いことに関しては主題の人に助けてもらうとか、そういう形で補いあえれば良いんだけど。「この問題はあの人が答えられませんかから」、と最初から明日来て下さい、じゃ困るけどね。

自分の主題以外やりませんっていうのも困る。ジェネラルで基礎的なものがある、その上にプラスαで、一人一人が違った得意な部分があればすごく助かると思う。

大学で学ぶ段階を過ぎて実務に入った後の養成については何かありますか？

図書館の仕事に関する知識、利用者に関する知識も、部署によって異なるものを持っているでしょう。それも補い合えたらサービスは随分変わると思う。例えば分類深度とか件名の選び方とか自分のところの利用者に合わせたとり方があるでしょう。その為には目録をとる人も閲覧カウンターに出た方が良いのは確か。

逆にカウンターの人も選書や受け入れを手伝えれば、図書館に入ってくる本の傾向を全体的に捉えることができますね。

利用者の利用状況を知って目録をとる、図書館の資料の癖を知って利用者の質問に答える、というように自分の守備範囲外の情報をも身につけていきたいですね。

ローテーションとかで全部を経験出来ればいいのに。全てを知って一つの事をやるのとそこしか知らないのとでは深さが全然違う。

でもそうやって得たスペシャリストとしての能力が今の状態では生かしきれないと思います。

今の日本の図書館は、新人・ベテラン・管理職と、一般の会社組織と同じで、スペシャリストとしての地位は無い。

確かに図書館の組織が大きくなると、経営というか管理者の資質と、今まで話してきたような資質とは、必ずしも相いれないものがありますね。

スペシャリストという人と、それを見極めて管理できる人とが必要ね。

そう、別の人事体系、別の評価が必要だと思う。

### 4. カウンター心得？

その他に全員が身につけるべき要素としてカウンセリングがある。カウンターに立って利用者に対応するのに、カウンセリングの能力が欲しい。

カウンセリングは1対1のコミュニケーション

ンだけれど、図書館員としては、サインも含めたプレゼンテーションの能力も必要。

知識だけではだめなのよね。着るものまで気をつけないと。

結構良く見られている。その割には何の為にそこにいるのか理解されていない。

怒るためだけじゃないのよね。

入れ物だけがあってもだめ。コンパニオンの要素も必要だと思います。

人の扱いを知っている人となると却って専門知識は無くてもいいのかもしれない。プロのサービス業と考えて、それなりの訓練を受けた美人のお姉さんを置いたりしてね。

いくらなんでも妥協できるレベルがありますよ。大学図書館は完全なサービス業にはならないと思います。

教育機関でもあるのよね。中には、サービス業ではない、と言い切る人も。ただ、現場の私達としてはもっとサービス業を見習っても良いのではと常々感じてはいる。先生では無いのに先生もどきか官僚もどきになってしまっているような時があるから。

でも組織が大きくなると、例外は認めないという意味で下っ端は官僚的にならざるを得ないんですよ。

そうは言っても先のルールの話ではないけれど、サービスとしておかしいと思ったら、考え直すことはできるはず。断り続けてあたりまえと感ずるようになったら官僚的の始まりでしょう。

教育機関であってもサービス業としての自覚はある程度持っていたいと思う。

#### IV. より良いサービスを求めて

私達は今、どうする……

湘南藤沢の図書館について随分いろいろな話

が入ってきますが、湘南藤沢を区切りに日吉の学生のためにもパーンと何かをしたい。

建物は古くなるのだから入れ物で利用者を集めることは出来なくなっていくでしょう。内から盛り上げないといけない。日吉ならではのサービスを。私達のやりかた、アイデンティティを打ち出したい。利用者のため、我々のために。スタッフがだらけては外に見えてしまうもの。

上からの指示ではなく、現場の問題意識で。

現場のニーズを出し、可能にしていく方向で検討する。利用者の立場に立って利用者のことを知る努力を忘れずに。常に考える状態を作って。

今の日吉は分担された仕事に各人が没頭しがちだと思いませんか。

良いサービスをするためにも、スタッフ同士のコミュニケーションの場は絶対必要です。「良いサービス」といっても、その定義は難しいけれど、ただ一緒に仕事をしている仲間の間では合意を作っておかなければいけないと思うから。

互いの仕事や日吉図書館全体の業務を知るためにも業務のローテーションは実現させたい。ルーティンワークなら可能だと思う。

一人一人が日常業務以外の場を作る。ワーキング・グループでの活動などで、もっと個々のネットワークで持っている情報を生かそう。

皆が日吉図書館をこうしていきたい、という一つの理想を持ち、それを力にしてね。

ミーティングはそのために有効に使いたい。

意識を高く持つ。新入生・通信のオリエンテーションや秋の企画といった行事は、とかく流されがちになる日常に「カツ」を入れる意味でも重要だし、共同作業、目的意識という点でも良い節目として位置づけられると思います。

10年といわず今日からですね。地道に。常に利用者とのコミュニケーションを考えて…。

## 日吉情報センター所長を経験して

前日吉情報センター所長

吉田俊郎

(法学部教授)



長い間日吉情報センター所長の重責を務められた衛藤教授の中等部長就任のため、その残任期間のお役目を果たすべく、1988年10月より情報センター所長をお受けしました。情報センターの業務につきましては、

全くの素人である私にとりまして、責任の重大性を感じ、出来る限り現場の業務に携わっておられる方々にたいする理解と、それらの方々にご迷惑をお掛けしないように心掛けながら任期を務めて参りました。この9月でそのお役目も、情報センターの皆様方の心暖まるご支援により恙無く終えることができ、皆様方に心から感謝申し上げます。

情報センターは、いま、湘南藤沢キャンパスの設立に伴い、大きな問題を抱えて居る現状であると私は認識いたしております。この大事な折りに、定年を間近に控えている私が、短期的なビジョンでこの大きな問題を捉えて行くよりも、より長期的な視点から、将来を見越して一つ一つの問題解決を図って行くことが大切かと思ひ、次期の日吉情報センター所長にその任をお譲りしたわけです。

そこで、私の大学図書館像の一端を述べさせて頂き、最後のお役目を果たさせて頂きたいと存じます。

最近の学問の特徴は、一つのジャンルのみで成り立つと言うよりも、多くの学問を結集した学際的性格を強く持つ傾向を示してきています。もし

も、単一学科の知識のみに頼り、重箱の隅だけをつついていると、井の中の蛙的になり、深い井戸の中からだけ物事を眺めてしまい、狭さと言う“程度”の問題だけに留まらず、その方向性を見誤り、全体的な真理を見失ってしまう恐れがあると思われまふ。

この様な学問の性質への転換は、その学問に携わる者にとって、隣接領域の広範な学問の諸知識が要求される様になって来ます。しかも、この様な学問の進展は目ざましく、急ピッチで進んでいる現在であります。

この様な状況の中で、学問の性質上から、研究者に対しても学生に対しても、情報センターの中で重要な役割を担うものは情報検索サービスであろうと思われまふ。なぜなら、どの情報が何処にあるかを素早くユーザーに提供し、ユーザーの研究の促進を陰ながら応援するものだからであります。それ故、情報センターでは情報検索に関する諸専門技術を研究し、それに習熟する努力を欠かすことは出来ないと思われまふ。近い将来に、この情報検索能力が、それぞれの図書館の価値を左右する様に成ると予測されます。

この事を十分にこなすためには、無駄なく情報を整え、必要に応じて、必要な情報をユーザーに提供できるシステムの構築が必要であり、コンピュータによるネットワークが、全體的に早急に組まれることが是非とも必要と痛感されます。これによって、各地区に於ける蔵書の重複を避け、現在の予算を有効に利用する事によって、蔵書の質と量を拡充する事が出来る事はもとより、必要とされる情報は緊急性を持つ様になってきています

から、その情報の緊急性に鑑み、研究者・学生を問わず、その居る場所で、必要とされる文献に何時でも接する事が出来る状態を作り出せるようになるでありません。

日吉情報センターの特徴は一般教育科目を受講している学生のための蔵書コレクションという性格を打ち出し、人文系から自然科学系に至るまでの幅広い教養的知識の宝庫として位置づけられてきました。しかし、前にも述べました様に、現代の学問の性質上から、グローバルな知識体系と、単一学問を超えたクロスオーバーな知識が要求される時代になって参りますと、それに応じた選書体制も多角化されなければならなくなって参ります。この様な時代的要請に応えるために、それぞれの情報センターが、それぞれの立場で独自に選書業務を行い、相互の図書館間に於ける蔵書の重複をもたらしていたのでは、限りある図書収納スペースの有効利用の妨げになるばかりでなく、予算執行の不適切化を招く恐れがあると思われま

す。各々の図書館が独立して、特色ある図書館形成を指向する必要性は言う迄もないことでありますが、慶應義塾という一つの組織の中であって、全体が相互に関連しあいながら、機能的に運営されて行く事も、今後の図書館の在り方ではないかと思ひます。この様な考えに立ちますと、塾内の図書館が、これから発足する湘南藤沢の図書館も含めて、一体化された図書館としての機能を発揮し、その中に在って、それぞれの図書館が独自の特色を際立たせることが重要になると思ひます。この機能を十分に発揮させるためには、塾内の相互貸借の流れの確保と、全塾内の図書館間の検索能力の充実を図る必要があります。この様な意味でも塾内のネットワーク化は緊急な要件であると思ひられます。また、塾内に留まらず、学問の性質上、広く情報を他に求める必要性も出て来る事でありましょう。それには、外部機関との情報交換という意味で、他大学との相互貸借など相互乗入れの制度や、諸種データベースの活用などは、今後の情報センターの重要な機能の一つとなることでしょうから、これらの情報交換システムの整備

と同時に、思い切った拡張を考えて行く必要があると思ひます。

最近の大学の在り方に対する大学改革審議会の動向を見て参りますと、一般教育科目の軽視とも取れる方向性が打ち出されて来ております。私はこの様な方向に対して真向から反対であります。現在の専門教育とは何か。大学院や一部の特殊技術教育を除き、大学4年間の教育は、将に全てが一般教育以外の何物でもないと考えます。社会が求めている大学卒業生の人間像は一体何かと言うと、学問・知識をしっかりと身につけることに依って養われる心の豊かさであり、これは岩波の国語辞典による教養そのものの定義でもあります。ただ、ここで問題となるのは、学問・知識が前にも述べました様に変革しつつある時代であるということでありま

す。それ故、それが機能するためには幅広い多様な知識を必要とするわけであり、さらにはこの知識が個々ばらばらにあると言うのではなく、それらが自らの内で如何に統合され、体系化されるかということが問われてきます。また、その幅広い知識を如何に利用していくかという才覚と、それによって如何に多様化された価値観の下で自らを対処させて行くかの筋道を築いて行くための手助けをするのが大学であると考えます。しかし、これらは学生自身が自らのうちに、大学に於いて学び取って行かねばならないものであると思ひます。この事は専門教育だからでき、一般教育ではできないと言う問題ではないと思ひます。どちらにしても、この様な学びの手助けをするのは図書館であり、そのための選書の役割を担って居るのが情報センターであります。それ故、この選書を誤れば、学生の多様な要求に応ずる事の出来ない図書館となってしまいます。この様な視点を踏まえて、個々の情報センターの機能的な選書がなされることが重要であると考えます。

以上の様に考えて参りますと、図書館は大学の中心であり、また、大学の顔でもあり、知識の宝庫でもあります。この大学の図書館の位置づけ次第で大学の価値も決まって来ると言っても過言ではないと思ひます。そして、情報センターの顔は

レファレンス・サービスであり、最も華やかで重要な業務であると言うことが出来ましょう。しかし、裏方で地味にそれを支え、図書館の顔の特徴あるものとしているのが選書業務であり、テクニカル・サービスは唯単なる図書の受け入れ、登録だけが業務ではなく、受け入れ時から、如何にして利用者のニーズに合わせ、容易に利用したい書籍を提供する事が出来るかと言う工夫を絶えず追求し、書名や著者名で検索するだけでなく、どのような情報を得るには、どのような書籍を求めれば良いかと言うことも同時に提供し得るようなシステム作りに努力を重ねて行っているのです。このような努力がなされてこそレファレンス・サー

ビスも的確にできるということになりましょう。パブリック・サービス業務においてもしかりで、利用者に迅速に情報を提供し、書籍の貸出を行なう事が出来るように、情報を処理して行けるのも一単独部署だけに依るのではなく、選書、テクニカル・サービス、パブリック・サービス、レファレンス・サービスなどが一体となって、一貫したチーム・ワークを組み上げることによって情報の流れを円滑に行なうことが出来ると言えましょう。

21世紀へ向けての図書館・情報センターのイメージを描いて見ましたが、これでは認識不足と言われるかも知れません。

#### 小 展 示 ニ ュ ー ス

三田情報センター

昭和63年

11月5日～平成元年1月8日

明治錦絵に見る秋から冬へ

平成元年

1月9日～2月28日

昭和天皇の御著作

3月14日～4月5日

ピーター・マサイアス学長の著作

(来塾記念小展示)

3月16日

中国訪塾使節案内用展示

4月6日～5月16日

『唐蘭船持渡鳥獣之図』全五冊展示

5月17日～6月7日

フランス革命を準備した思想家達の著作

6月7日～6月20日

高村象平名誉教授追悼記念小展示

6月21日～6月30日

近世書誌データベースの試み

7月1日～8月31日

フランス革命200年記念—part 2—

1789年に登場した人々

理工学情報センター

平成元年

6月5日～6月17日

ユークリッド『幾何原論』

7月5日～7月22日

理工学情報センター(松下記念図書館)の

創立者松下幸之助氏を偲ぶ

## 「わだつみの像」について

七戸克彦

慶應義塾新図書館の二階壁画を、当時日本では無名だったジェニファー・ポートレットに委嘱したのは、いったい誰だったのか。その審美眼の確かさは、当時の美術雑誌の最大級の賛辞からも推し量ることができる。彼女の描く海の色、光の移ろい、ゆったりと流れる静謐な時間は、私を少しやるせない心持ちにさせる。本を抱えたまま、私は考える。それとも、これは郷愁だろうか、と。

……図書館に置かれた美術作品は、私を時おり物思いに沈ませる。この5月に新図書館地下1階に寄贈された、本郷新「わだつみの像」のエスキース（高さ78cm、なお現在全国6箇所にある完成品は190cm）もそうだった。今、吹抜けの階段を降りて書庫へと向かう学生のうちの何人が、この小さなブロンズ像の由来について知っているのだろうか。この彫刻のたどった数奇な運命については、少し話しておかねばなるまい。

もともとこの彫刻は、戦没学生の手記『きけわだつみのこえ』刊行を契機に、昭和25年に制作され、当初は東大構内（図書館前の噴水の場所）に建てられるはずだった。「私は限りなく祖国を愛する。けれど愛すべき祖国を私は持たない」、「生あらばいつの日か、長い長い夜であった、星の見にくい夜ばかりであった、と言い交わしうる日もあるか……」と呟きつつ死んでいった学徒兵の哀しみ、切ないまでの平和への祈りを映し出す鏡として、この像は成った。それは、政治や思想・宗教を越えた普遍的な誓いのモニュマンだったはずだ。ところが、東大はこの彫刻の設置を拒絶し（当時の記録によれば「東大には學術功勞者以外の記念碑を建てた例はない」「最近では東大にも女子学生が増えており、男子の裸体像は好ましくない」というのが拒否の理由だった）、その結果、この像は3年もの間物置に放置されてしまう。しかし、そのことを聞き知った末川博立命館大総長は、昭和28年、この像を進んで引き取り、広小路校舎構内（研心館前）に建てることを決定した。末川博の名は、法学学を学んだ人間なら知

らぬ者はない、不世出の民法学者、京大学派の泰斗である。と同時に、彼は、あの滝川事件に抗議し、戦前の暗い時代の中で、学問と研究の自由を主張して京大を去った良心的な研究者でもあった。だから、人類普遍の願いの込められたこの像が、東大から拒否され立命館に建てられたことは、同時に、清廉な精神を貫き守り通した一民法学者の至誠と勇断を象徴する出来事でもあったのだ。しかし、この像は、あたかもその希求する平和の誓いが困難な道であるように、再び不幸に見舞われる。昭和44年、学園紛争の暴風雨のさなか、全共闘派学生により像は台座より引きずり降ろされ、頭を割られ、腕をへし折られた……。

もっとも、告白すれば、私は、この像をめぐる政治的な事件については、ほとんど興味が無い。むしろ関心があるのは、人々に感動と共感を覚えさせ、あるいは過激派学生に恐怖と不安を喚起させるような彫刻を作り上げた、本郷新という彫刻家である。彼の制作した彫刻は、後にも一度受難に逢っている（昭和47年、旭川・常盤公園にある「風雪の群像」が、過激派の手により爆破。破壊の理由は、アイヌの古老が座り、和人が立っているのは屈辱的だ、という極めて幼児的な鑑賞眼に基づくものであった）。彼の彫刻が、これを破壊せずにはいられないほどの衝撃と畏怖を与えたことは、この彫刻家の力量を裏打ちするものといえるだろう。破壊者は、究竟の美の体現を前にして、破壊という行為によってしか感動を表現できなかったのだ。だが、差別なき普遍の平和と愛を願って作り上げた彫刻が、一度ならず二度までも打ち壊されたとき、敬虔なクリスチャンでもあった彫刻家の心の内はいかばかりであったか。

ともあれ、そのような先入観をもってこの像を観ることはない。本を抱えてその前を通り過ぎるとき、求心的な美しさに、私は思わず引きずり込まれそうになるだけだ。彼の故郷札幌にある彫刻、駅前の「牧歌」、大通り公園の「泉の像」などもそうだった。私は突然、子供の頃観た石狩川の河口、暗い色をした北の海に面した、ハマナスの咲く砂丘にある彼の遺作「無辜の民」を観に行きたくなる。「わだつみの像」を前にして、私はふと考え込む。それとも、これは郷愁だろうか、と。

（法学部専任講師）

## UC Berkeley の学生アシスタント に対する教育方法

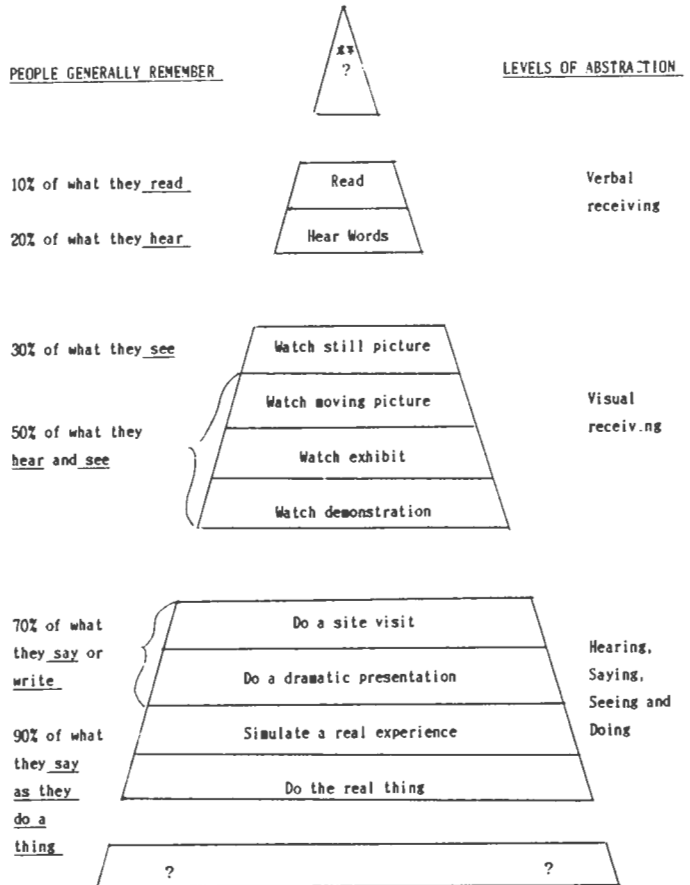
加藤 好 郎

(日吉情報センター  
パブリック・サービス課課長代理)

### はじめに

UC Berkeley (以下 UCBとする) にはメインライブラリーを中心に23の分館がある。総スタッフ数は1100人で、そのうち125人がアカデミック・ライブラリアン、350人がキャリア・サポートスタッフ、残りの625人がスチューデント・アシスタントである。このように館員も多く専門性がはっきりしているアメリカの図書館でさえもプロのライブラリアンだけでは十分なサービスはできない。パートで働く学生の力に負うところが当然多くなって来る。このことは、人件費削減の為に専任の職員をとらない傾向にある日本の大学図書館にも近々同様な問題が起こる可能性があるとみることもできる。UCBではいかに機能的、合理的に学生を教育してより質の高いサービスを展開するかについて真剣に取り組んでいる。今回の私の海外研修のレポートは、UCBの一年間においてうけた研修のひとつである、Managing student training monitoring and motivatingを紹介することにする。

様々なトレーニングの方法の中でより効果の上がる方法を考えたものである。図1はトレーニングのレベルによって記憶(効果)の度合いが異なる事を表したもので、左側が人の記憶、右側がトレーニングのレベルを表したものである。このDaleのモデルで分かることは、効果的なトレーニングは実際に業務をさせることが一番で、現場を実際見せたり印象に残るプレゼンテーションをすることが最小限必要であることである。単に読ませたり、聞かせたり、静止画を見せただけではあまり効果があがらない事が立証されている。



### I. 効果的な教育方法

#### 1. DaleのCone of experience DaleのCone of experienceは

\* See Wiman & Mierhenry, Educational Media, Charles Merrill, 1969, for reference to Edger Dale's "Cone of Experience."

\*\* Question marks refer to the unknown.

## II. 教育の組織化

1. 研修を体系的にする。
  - a. 仕事のチェックリストを作る。
  - b. 研修の構成を考える。  
話を聞かせる事で行うか、書かれているものを読ませる事で行うか、デモンストレーションを行うか、実際に業務をさせるか等。
  - c. 仕事をすすめる上でどんな間違いが多いかを予め把握しておく。
  - d. いつ研修を終えるかを決めておく。
2. 研修を行う上で身構えておく点。
  - a. 学生に対して先入観を持たない。
  - b. 失敗を歓迎する。
  - c. 理想とする研修方法をあらかじめイメージしておく。
  - d. 研修の標準となるモデルを作っておく。
3. 研修をすすめる中で研修方法をテストする。
  - a. 仕事の質によって教え方を変えてみる。
  - b. 教える上で幾つかのチェックポイントを設けておく。
  - c. 読ませる教授法をテストする。
  - d. 話す教授法をテストする。
4. 機械的にフィードバック出来るように研修を組んでおく。
5. 研修で実際行っている仕事そのものをチェックする。
  - a. 予め仕事の難易度を決めておく。
  - b. フィードバック出来るような仕事を用意しておく。
  - c. 快適に仕事をすすめられる環境を作っておく。
  - d. 仕事に対するアイデアを常に学生に求めておく。
6. 研修をすすめるうえでのチェックリストを作っておく。
  - a. 分かりにくい点をどのように教えるか。
  - b. やる気のない雇用者にどのように動機づけをするか。

- c. どのようにしたら出勤状態を良好に維持できるか。
- d. どのように、どのような、報酬を与えるか。
- e. 適切な評価方法を考える。
- f. 単調な仕事をどのようにすれば正確に維持できるか。

## III. 仕事に対する心得マニュアル

1. 態度と行動
  - a. カウンター以外の仕事の忙しさの為にカウンターにでることが少なくならないようにし、利用者がいつでも接し易いようにする。
  - b. カウンターに来た利用者あるいは何か求めていそうな利用者には仲間との話をやめて利用者に応じたり指示を与えたりする。
  - c. 利用者の求めているものを確認し与える事。例えば、援助が必要な利用者がさまよっていたら、カウンターを仲間にかまかせてからカウンターを出て書誌的ツールと一緒に探すようにする。
  - d. 質問の内容を把握して質問に適切な分館を紹介するようにする。
  - e. 冷静さと礼儀正しさを持ち図書館で働く者として適切な態度をとるようにする。難しい質問（時間のかかる）を持った利用者に対応しながらも簡単な質問（時間のかからない）を持った利用者を効率的に処理していくようにする。
2. User instruction
  - a. 次の場合インタビューのテクニックが必要である。
    - ・ある物事に限定して利用者に対応する場合；利用者の質問を注意深く聞き自分自身の理解度を確認しなければならない。すぐに判断していき結論にとばないようにする。



- 情報がある程度限定されている時はその目的について尋ねるようにする。
  - 必要ならば複数の利用者と同時に対応する；例えば雑然とした簡単な複数の質問に答えなければならない時や、検索の戦略を複数の利用者に教えなければならない時。
- b. 資料検索と利用者への援助
- 正確な書誌情報を見つけ利用者に提供し、最新情報や資料源を教える。例えば利用した目録や書誌的ツールの提供。
  - 利用者にとどのように図書館や目録を利用するかを教える。例えば利用者と一緒に探してみる。
  - LC の Subject headings の使い方を利用者に教える。例えば LC SH と目録との関係を教え LC SH の構造を解説する。
3. Information desk の仲間と協力してサービスを行う。
- a. カウンター交代の際には素早く Desk に着くようにする。
- b. 仲間に援助が必要な時はてぎわよく提供し又仲間からの援助も必要ならば積極的に受けるようにする。
- c. 仕事に不必要な関係は利用者にも仲間にもあまりもたないようにする。
- d. Information desk での仕事の意味を十分に理解する。
- 数分以上 Desk を離れる時は仲間にその事を知らせる。
  - ひとつの質問に対して時間がかかりすぎないように注意し、一人に質問が集中したら仲間で分担する。
- e. 館内整備の仕事をすすんでする。例えば、コンピュータのトラブル、仕事の終了後の机上の整理、統計類の整備、開館閉館時の作業マニュアルの作成等。
- f. 同時に多くの要求があった場合にどのよう
- うに処理するかは熟練する。
4. 資料、コレクション、そして政策に関心を持つようにする。
- a. 図書館のコレクションや資料等について継続的に自分で研究する。
- b. カード、マイクロフィッシュやコンピュータのカatalogを能率よく適切に利用する。
- c. 利用者にサービスをしたあと Desk の仲間と もっとよい回答があったかどうかの話し合いをする。
- d. カレントな事件（キャンパス内、ローカル、国内、国外）の知識を持つようにする。
- e. Desk の Information file を利用する。適切な回答をするために、最近のメモ、コンピュータのドキュメンテーション、アーカイブバインダー等。
- f. コレクションや主題あるいはテクニカル・サービスの知識を仲間と共にわかちあうように努力する。
5. 図書館サービスと政策の知識
- a. 基本的な図書館のコレクションデベロップメントの政策を説明できるようにする。例えば、メインライブラリーのコレクションと分館や Moffitt (Undergraduate の図書館) との違い、Approval plan や Firm orders の説明、Public library と Academic library の取書方針の違い。
- b. 利用者に基本的なパブリック・サービスの政策を説明できるようにする。例えば、電話サービス、入館券の発行、NRLF (North regional library facilities) へのアクセス、Inter library borrowing service 等。
- c. 図書館の有効な利用方法を利用者適切に説明できるようにする。例えば、Stanford と Berkeley の Cooperative Program, BAKER, Library tour や目録のインストラクション・セッション、コンピュータレファレンス・サービス等。

IV. 仕事の理解度チェックリスト

1. Circulation pop quiz (表1)  
17問の各々に答え一問につき10Point与えられる。85Point以上が合格点である。
2. 自分の仕事をフィードバックする為のチェックリスト

表 1

Circ. Desk Pop Quiz #1 - the winner will receive a yummy treat. Each question is worth 10points.

- 1) Can patrons look at the terminal screens?
- 2) Where can patrons break a 5 dollar bill?
- 3) Where do patrons go for refunds from the coke machine?
- 4) What happens if you don't say Y to PROCEED? when re-newing?
- 5) What do you do when a book comes up NOT ON FILE, NEW? when checking in?
- 6) What happens when you check-in or renew when fines are purging?
- 7) Can a patron check out a book without a library card?
- 8) What 3 ways can a patron re-new a book?
- 9) What color card does a current grad student or faculty member from another UC campus get?
- 10) When would the above card expire?
- 11) What does it mean when a patron comes up STATUS S when checking out? and what should you do?
- 12) What does it mean when a patron has an asterisk next to their name on CLSI?
- 13) What does NRLF mean?
- 14) Why do you put a date in the NOT NEEDED AFTER line on searches and holds?
- 15) What do you do if the billing line is busy?
- 16) What do you do when you find a damaged book in the book drop?
- 17) How can a patron find out which books they have checked out?

- a. 次の事項について自分と照らしあわせて考え反省の材料とする。
  - 指導力が無い。
  - いつも何か言われるまで待っている。
  - ある問題に対するすべての情報を持っているのに実際の行動には移れないことでがっかりしている。
  - 立派な仕事をしている。
  - 素晴らしいタイプリストである。
  - タイプミスや簡単なミスはすぐ直してくれるので素晴らしいと思われている。
  - まわりでは立派な人とされている。
  - 容易にすべての人と付き合い事ができる。
  - スタッフと仕事をする点で、友好的、冷静な対応はスタッフをやる気にさせる大事な要因であると思っている。
3. 自分の行動に対するチェックリスト  
表2の1から7までの問いに対して Behavior あるいは Motive のどちらかに答え、次に Specific あるいは General のどちらかに答え、Motive or General あるいは両方の場合にはその理由を書くようになっていく。
4. 教えられた仕事のチェックリスト  
表3の1から20までの項目に対してそれが終了した日付を記入しておく。この事で仕事を教わる上でのもれを食い止めることができる。

おわりに

以上の綿密なスケジュールのもとで研修が行われている。たとえ分かり切っている様なことでも丁寧にもれのないように教えている。このことですべての学生スタッフが同レベルで業務を把握し利用者に同レベルのサービスを展開することができる。On the job training の必要性が問われている昨今このレポートが研修プログラム作成の一助となれば幸いである。

表 2

	BEHAVIOR or MOTIVE	SPECIFIC or GENERAL	If M or G, REWRITE
(1) You were late to work four times this week.			
(2) You have a negative attitude toward patrons.			
(3) You talk too much during staff meetings.			
(4) Diane was shocked by your language.			
(5) You handled the situation ingeniously.			
(6) You seem rather immature and unmotivated and are sloppy to boot.			
(7) You deliberately made me look foolish in front of my colleagues.			

表 3

I. GENERAL ORIENTATION

1. Personnel basics
2. Tour of the library
3. Tour of the circulation area
  - a. Guidelines for staff conduct
  - b. Employment & scheduling policies
  - c. Evaluations and student supervisor

II. CALL NUMBERS

1. Call numbers module
2. Sorting onto discharge trucks

III. CARE OF THE COLLECTION

1. Care of collection module
2. Shelving bound volumes
3. Shelving statistics

IV. INTRO TO CIRCULATION

1. Circulation module
  - A. Circulation files
    - (1) Practice filing cards

B. Borrower identification

C. Loan periods

D. Filling out charge cards

E. Charging out

- (1) Practice charging

F. Discharging

- (1) Practice discharging

G. Renewals

- (1) Practice renewing

- (a) by phone

- (b) at the desk

H. Circulation statistics

V. PHONE PROCEDURES

1. Module on phone etiquette
2. Practice answering & transferring calls

VI. SECURITY

1. Module on security taping
  - A. Tattle tapes bound volumes
  - B. Tattle tapes unbounds

- 2. What to do when alarm goes off
- VII. UNBOUND MATERIAL
  - 1. Sorting unbounds into type (display journals, nondisplay journals, technical reports news-letters)
  - 2. Sorting display & nondisplay to be shelved
  - 3. Shelving display journals
  - 4. Shelving nondisplay unbounds in stacks
  - 5. Shelving statistics
- VIII. TECHNICAL REPORTS
  - 1. Module on technical reports
  - 2. Filing microfiche technical reports
  - 3. Shelving paper technical reports
  - 4. Shelving statistics
- IX. SHELF-READING
  - 1. Shelf-reads an assigned section
- X. STATISTICS
  - 1. Module on statistics
- XI. SEARCH/HOLD REQUESTS
  - 1. Module on searches
  - 2. Practice completing searches
    - A. Holds
    - B. Recalls
    - C. Second holds
    - D. Not in shelf-list
    - E. Reference books
    - F. Reserve books
    - G. Declared missing
    - H. Storage
- XII. NRLF REQUESTS
  - 1. Module on NRLF
  - 2. Uses FINDLIST
  - 3. Uses electronic mail to page material
  - 4. Processes requested material
  - 5. Processes material to be returned
- XIII. OVERDUES
  - 1. Module on overdues
  - 2. Processes overdues
    - A. Searches for material
    - B. Sends overdue notices
    - C. Overdues statistics
  - 3. Procedures for patron responses
    - A. Billing
    - B. Patron claims returned
- XIV. PUBLIC SERVICE UNDER PRESSURE
  - 1. Module on problem patrons
  - 2. Discusses module with supervisor
- XV. MARKING
  - 1. Module on marking
  - 2. Processes material to be marked
- XVI. MENDING
  - 1. Module on mending
  - 2. Processes material to be mended
- XVII. SNAGS
  - 1. Module on snags
  - 2. Clears the shelf
- XVIII. OPENING
  - 1. Module on opening procedures
  - 2. Walks through opening procedures with supervisor
- XIX. CLOSING
  - 1. Module on closing
  - 2. Walks through closing procedures with supervisor
- XX. EMERGENCY PROCEDURES
  - 1. Module on emergency procedures
  - 2. Safety tour of the library, including emergency exits and fire extinguishers

## UCLA での研修を終えて

酒井明夫

(医学情報センター  
情報サービス担当係主任)

### I. UCLA (University of California, Los Angeles)

1988年10月から89年7月までの10カ月間、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の図書館で研修する機会に恵まれたので、その概要を報告したいと思う。

日本でもUCLAというロゴで知られるこの大学は、ロサンゼルス空港からフリーウェイ405で北へ20分程上がったウェストウッドという街の中にある。1919年に創立、現在学生数約34,000(うち大学院生11,500)、教員数約3,000名を数え、同じカリフォルニア大学のパークレー校と並んで規模の大きい州立の総合大学である。2つのカレッジ、11のプロフェッショナルスクールから成り、他に24の研究センターを持っている。気候は温暖晴朗な地中海性気候に浴し、冬季を除いて降雨がない。四季折々の風情はないが、キャンパスはいつも豊富な緑に囲まれ、学生の雰囲気も明るく、開放的である。

### II. UCLAの図書館

UCLAには人文・社会科学分野の研究図書館である University Research Library (以下URL)をはじめとして、学習図書館の College Library, 特殊コレクションを収めた Clark Memorial Library (この図書館のみキャンパスの外にある)、それに法律、医学、音楽などの特定分野の資料を収蔵する16の subject library がある。蔵書冊数約600万、継続雑誌92,000タイトルは全米1位のハーバード大学には及ばないが、年間増加冊数は近年それを凌ぐ勢いである。

学習図書館、教育・心理学図書館の入った建物

は Powell Library と呼ばれ、キャンパスのシンボルである Royce Hall と向き合う形で建てられている。両者とも大学創設当初からの建物であり、キャンパスの中心かつ最も美しい部分を構成している。UCLAの敷地北西の外れには Southern Regional Library Facility という名の保存書庫的機能をもったビルがあり、他のUCキャンパスにある図書館と共同利用されている(パークレー校には Northern Regional Library Facility がある)。

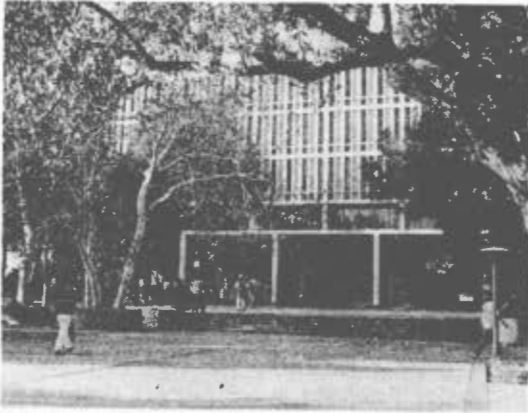
UCLAの図書館について語るとき、忘れてならないのはORIONと呼ばれる学内で開発されたオンライン情報システムである。現在、目録・受入・閲覧の3つの機能を持ち、学内の図書館業務を強力に支援している。図書目録情報に関しては、1977年以降整理されたレコードが蓄積されており、それ以前のレコードも週及入力中である。雑誌については継続中のもののほとんどがロケーション、ホールディング情報とともに入力されている。受入システムにおけるメリットのひとつは資料の発注・受入・処理状況がいつでもわかることである。このため、例えばカウンターで利用者からリクエストされた図書がまだ未整理と判明すると、優先的にそれが処理される仕組みになっている。閲覧システムはURLや医学図書館など一部でしか稼働していないが、いずれは全館で



Powell Library

導入される予定である。ORIONの端末は全学の到る所に設置され、個人所有の端末からでもアクセスが可能である。

### III. Richard C. Rudolph Oriental Library



URLの入口  
2階に Oriental Library がある

今回の研修の大半を過ごした Oriental Library は中国語、日本語、韓国語（三者を合せてCJKといわれる）で書かれた資料を収集対象とする subject library で、場所はURLの2階にある。蔵書数約27万冊、そのうち日本語の資料は約11万冊を数え、北米西海岸ではパークレー校を筆頭に、スタンフォード大学の Hoover Institution、ワシントン大学、ハワイ大学、ブリティッシュコロンビア大学と並んで有数のコレクションを形成している。蔵書の特色としては、仏教が最も包括的で、他に美術、歴史、考古学、近世文学が充実している。フルタイムのスタッフは中国人4名、日本人3名、韓国人1名で、これにパートタイムや学生アシスタントを加えると総勢30名以上になる。図書館としての機能はURLとは全く独立している。OCLC-CJKを1986年から導入しているが、89年の7月から5年をかけて、カード体の所蔵レコードすべてを週及入力する計画が組まれている。

### IV. 研修の内容

UCLAの学事は4学期制(Quarters)で、秋の学期は9月の末から開始される。夏の学期はないので実際には3学期となるが、10カ月にわたる研修もおおよそ学期に合わせて3つに分けられる。

10月～12月までは Oriental Library で受入れている日本語雑誌の見直し、それにOCLC-CJK端末による和図書のデータ入力を行った。和図書の内容は Julian Wright Collection という78年に図書館に寄贈された江戸・明治期の美術書、および Harvard-Yenching 分類で整理された美術書である。両者の書誌データをOCLCを使ってオンライン化するよう計画されたこのプロジェクトは Title II-C と呼ばれ、政府から得たグラント(助成金)で実行されている。Wright Collection はほとんどがオリジナルカタログを必要とするもので、フルタイムのカタログガーがこのプロジェクトのために採用されている。Yenching 分類の図書は現在使われているLC分類に書き替えて入力される。研修はOCLCのフォーマットやCJK端末に慣れるために、すでに完成された入力用シートをそのままキーインすることから始まった。また、この学期では週に2回、Library School の Descriptive Cataloging のクラスを聴講することになった。授業に対するアメリカの学生の態度はみな積極的で真剣である。どんなことでもよく質問をするし、意見も述べる。日本と違うのはプロフェッショナルスクールなので年齢層の幅が広く、図書館実務の経験者も多いことである。

1～3月は Yenching 分類の図書のうちLCカードがすでにあるものを選び、件名を最新のものに修正して入力用シートに記入する作業を担当した。この間、やはり週2回、Library School の Subject Access のクラスを聴講した。3月半ばにはワシントンでAAS (Association for Asian Studies) の年次総会が開かれ、これにも参加することができた。AASはCEAL (Committee on East Asian Libraries) という委員会のもと

に全米の東アジア図書館で働くライブラリアンが一堂に会する場でもある。会期中にLCの日本語セクションを、また会議終了後はコロンビア大学、プリンストン大学、イエール大学、ハーバード大学、シカゴ大学のアジア図書館を見て回り、そこで働く多くのライブラリアンと接する機会を得た。

4～6月はYenching分類の図書のうちLCカードのないものについて、LC分類、LCの件名表、AACR2を使ってオリジナルカタログを作成する作業を行った。この学期はクラスの聴講はなく、そのかわりに毎週10時間、他の図書館をオブザーバーとして見聞する機会を与えられた。5月後半はURLのレファレンス、6月の1か月間は生物医学図書館、7月の1週はURLのサーキュレーションにおいて現場を体験した。また7月の2週目はカリフォルニア大学バークレー校、スタンフォード大学(Hoover Institution)を訪ね、それぞれのアジア図書館を見学した。

## V. 感想

UCLAを含め、この研修ではいくつかの米国内にある東アジア図書館を見ることができた。ここではOCLCあるいはRLINのCJ K端末を導入することによって業務の省力化や資料の有効利用を計っている。資料の購入については、例え

ば日本の図書の場合は数年来の円高の影響を被り、どの図書館でも以前のような収集が難しい状況にあるが、各種のグラントを獲得したり、特定資料を分担収集することで対処している。利用面ではスペース不足が共通の問題であり、各館様々な対応策がとられていた。いずれにせよ、ライブラリアンたちのこうした地道な努力が各々の大学におけるアジア研究を支えていることを実感した。

今回の研修のもうひとつの収穫はURLと生物医学図書館での実習である。過ごした時間は僅かであったが、そこで受けたインパクトは大きい。とりわけ医学図書館での体験は日本の医学図書館との比較という点からも興味深く、たいへん参考になった。

アジアセクション以外での長期実習は言葉のバリアや受け手の事情もあってむずかしいが、今後日米双方の協力と理解を前提に、その大学の中央館を軸とした多様なプログラムが展開されればと思う。

最後に誌面を借りて、筆者の受入先となったOriental LibraryのヘッドであるJames Cheng氏、日本語部長の三木身保子氏、並びにスタッフのみなさん、そして情報センター本部事務室をはじめ関係各位に心より謝意を表したいと思う。

## 第8回慶應義塾図書館講演会

「Two English manuscript fragments (二葉の写本断片)」

平成元年5月16日 於 図書館・新館A-Vホール

講師 サザビー社(ロンドン)写本部長 クリストファー・ド・ファメル氏

## 「日米大学図書館会議」の意義

上田 修 一

(慶應義塾大学文学部教授)

人口の米国第2位の地位をロスアンジェルスに譲った「風の街」シカゴの北、約150キロのミンガン湖沿いにラシーンという小さな町がある。1988年10月にこのラシーンで日本と米国の大学図書館関係者計60名ほどが集まり、「第4回日米大学図書館会議」が開かれた。

会議都市でもあるシカゴではなく、この町で会議が開かれたのは、ここにジョンソン・ワックス社の本社がおかれ、ジョンソン財団の施設があるためである。日米大学図書館会議は、ジョンソン財団から援助を受けており、財団の施設であるウイング・スプレッドで会議が行われた。ウイング・スプレッドは、新宿御苑の2倍ほどの広大な敷地にフランク・ロイド・ライトの設計による建物があるという会議には大変恵まれた環境である。

この会議の内容については、すでにいくつもの報告があり、また、会議録も出版されることになっており、さらに時期を失してもいるので、ここでは、「日米大学図書館会議」の意義について述べることにしたい。

第3回からすでに13年が経過し、継続していることさえ永く両国で忘れられていたこの会議の第4回が開かれることを聞いた時に、まず考えたのは、日米の大学図書館の間に話し合うべき共通した問題があるのか、ということである。戦後の日本の大学図書館は米国の影響を大きく受けてきたとは言え、大学教育における図書館の役割からその運営、サービス水準にいたるまで、相違があるというより異質なものはあるまいか。

この会議の米国側の代表であるウェルチ教授は、ノーザンイリノイ大学図書館の館長であり、我々は、その図書館を見学する機会に恵まれた。

この大学は、シカゴから3時間も離れたデカルブにある小規模な大学であるが、120万冊の蔵書があり、受入図書数3万冊、雑誌1.8万誌、専門教育を受けた80名の図書館員がいる。年間貸出冊数50万件、年間400件のオンライン検索の利用の過半数は教員である。図書館は、帰宅する図書館員に危害の及ぶ危険があるにもかかわらず、午前2時まで開館している。これが米国のどこにでもある大学図書館であり、大学運営における図書館の位置づけ、蔵書、サービス、図書館員の全ての面で日本の標準的な大学図書館とは大きく異なっていると言わざるをえない。

会議の前に国内で日本側の出席者が集まり、何回か打ち合せが行われた。その際には、これまで米国の大学図書館に多くを学んできたが、今回は、機械化などでは日本側でも多少は貢献できる面があるかもしれない、しかし今後の会議の継続には積極的にはなれない、という意見が多かった。

しかし、2日にわたる会議の第1日目が終わった時点では、両国の参加者の間で、会議を成功とする感想が多くなり、会議の継続が合意された。

会議は、同時に二つのセッションを開き、各セッションには十数名ずつが参加し、同時通訳により議論するという形式で行われた。日本の参加者にとっては、日本語で発言できるわけであり、比較的活発な意見交換がなされたことが、会議の肯定的評価に至った原因であると考えられる。特に今回は、両国から次の世代の代表として、ほぼ30歳台の6名の参加者が含まれ、日本側の次世代代表者は、全く臆することなくよく発言していた。

つまり、議論のテーマというよりは、直接に議論を交わすという次元で双方が会議の意義を認めたのである。これは、いわば自明のことではあるが、図書館関係者の交流そのものが重要であることが確認されたわけであり、結局、会議の継続にはこれで十分であったのである。

しかしながら、議論の内容については必ずしも十分ではなく、また参加者についても問題が残



る。

会議のテーマの中では、いわゆるC J K、日本の情報へのアクセス、それに資料保存が主たるトピックであった。資料保存は、日本の大学図書館が何の活動もしていないため、米国の資料保存利用委員会の20年をかけて600万冊をマイクロ化する計画についての質問が中心であった。

C J Kと日本の情報へのアクセスの問題は、構造的に似ているので、後者について日米間で論ずることの意義を考えたい。

日本の情報へのアクセスには、二つの観点がある。一つはいわゆる「日本情報問題」といわれるものであり、これは米国よりも欧州で議論されており、二国間の問題ではない。もう一つは純粋に日米間の情報の不均衡であり、これが日米間で今日的で切実な問題であることは疑い余地はない。しかしながら後者に限れば、日米間の情報摩擦は経済摩擦の枠組みの中の技術摩擦のさらに一部であるとみなされる。日本の大規模な大学図書館の多くは基本的に文科系であり、米国の大学図書館の日本コレクションも文科系である。従って、この技術情報の不均衡を日米大学図書館会議で論じて、双方が一般論を述べる以上のことはできないと考えられ、また、そのような結果となった。

本来は、この会議を日米間のいくつものパイプの一つと位置づけ、双方がこの問題の専門家を参加させて、実状の把握に努め、論議を重ねる方向に進むべきであろう。ただし、日本側は日本の技術情報には誰でもアクセス可能であると主張するわけであるが、米国が望むのは企業の技術開発に関する情報であるため、最後には大学図書館の枠をこえてしまうことになるのは免れない。

次に、参加者の問題である。日本の場合は、館長と事務長や事務部長などの図書館管理者が中心である。大学図書館長は通常、図書館専門職ではないので、参加者のかなりの部分が図書館員以外で占められることになる。これを問題とすることもできよう。しかしながら実際には、館長の多くは、会議の性格をよく理解し、専門の立場からあ

るいは日本の大学運営について、積極的に発言する場面が多かった。むしろ、日本の大学図書館の全体的な状況について十分な知識を持った図書館実務者がどれほどいるのか、という点の方が気にかかる。

一方、米国側参加者には毎回、米国の日本コレクションの担当が含まれている。今回もテーマの一つに日本コレクションの問題が取り上げられており、米国の大学図書館で資料費削減のために日本文献の購入が困難になっており、日本人の図書館員が減少しているなどの問題が示され、日本側の協力が求められた。しかし、詳しく尋ねると各大学の日本研究への比重によって図書館ごとに事情は異なっているようであった。日本の文献は何でも寄贈して欲しいという図書館もあれば、困ってはいないという図書館もある。中国、台湾、韓国などの東洋系の蔵書あるいはそれを担当する図書館員との関係もあり、複雑な状況に置かれていることは理解できたが、具体的な解決策が出てきたわけではない。また、日本コレクション担当者の大多数からは、他のテーマに関してほとんど発言がなかったのは残念であった。

この会議に参加した日本側の参加者は2班に分かれて、約1週間にわたり米国内を旅行した。日本では、国公立の大学図書館の人々が交流する機会が極めて乏しい。国立大学には国立大学図書館の組織があり、また人事の交流がある。私立大学は私立大学図書館員だけの会合が主として地域的に行われている。しかし、公立大学図書館を含めた全国的な活動はほとんど行われていない。こうした実状からみれば、会議の副次的な効果であり、また一過性であるかもしれないが、相互に知り合う機会が得られたことは評価できる。

特に、若い世代を中心にこうした機会を増やすことが今後の日本の大学図書館にとって必要である。次回の日米大学図書館会議の開催のために、国公立の図書館員が継続的に協力しながら準備を進める体制を作るのが望ましいと考える。

## 一太郎でこだわる

小 鷲 武 光

昨年夏からワープロソフト一太郎を使い始めた。このソフトは概して使い易く、なかなか重宝している。どのワープロでも使う人一人ひとりにとって十分満足というものはないと思う。一太郎も私にとってそうであるが、自分なりに工夫して遊び心も加え少しこだわりを持ちながら使っている。

一太郎には原稿用紙に印刷する機能があるが、原稿用紙の規格が決まっている。いろいろな原稿用紙に印刷できるようにはなっていない。規格の原稿用紙を使わずに原稿印刷したらどうなるか。文書を規格外の原稿用紙に印刷すると句読点が前の文字と同じ桁目に印刷され、句読点の桁目は空白となる。又、行頭禁則処理が施されているので行頭に句読点が印刷されず、行末に一字多く印刷される。これらの問題を無視して原稿用紙にそのまま印刷して使用しても大した影響はないのだが、私はここで少しこだわってみた。先ず文字を倍角に変換して印刷してみた。倍角文字にすると行頭禁則処理は解除される。句読点も正しく桁目に印刷される。だが原稿用紙によっては文字幅が大きすぎて桁目いっぱいになり読みにくいという結果になった。そこでこのまま縮小印刷してみた。これはなかなかうまく印刷できた。四倍角縮小印刷なら更に良いと思うが、いずれ活字になるものならばこのままで十分と思う。四倍角縮小は読みやすいと思う。

四倍角までの文字が使えるので、これを使って掲示物を作ってみた。B4程度の文書内容をA3の大きさに掲示物を作れた。文字が明朝だけなのでなんとも単調であるが、サインペンで手書きするよりもまだましである。カラー印刷をしてみることで単調さから抜け出せた。更にカラー用紙に印刷することできれいに仕上げることができた。一応はこのあたりでそっと自己満足した次第である。

一太郎を導入する以前に、2列10片と4列20片のラベル用紙があった。これ無駄にせずなんとか活用したかった。ラベル用紙だと先ず考えられるのが宛名印刷である。一太郎にはタック印刷の機能があるが、これも規格が決まっているので、この用紙は規格には合わない。宛名印刷するには連続用紙に印刷をするトラクタフィーダーが必要だが、これはつけていない。一太郎の機能を使っての宛名印刷は不可能であるが、残っていたラベル用紙に宛名印刷はしたい。これはちょっと面倒であったがなんとか目的を達成できた。一太郎の罫線はなかなか強力であり、罫線の使い方次第では便利である。先ず罫線を使い10の枠、20の枠をもった書式を設定した。この枠内に宛名を印刷できればいい。この枠内に宛名を差し込み印刷ができるようページ分を設計し、罫線を消して保存した。次に差し込む文章を作成する。これが少々面倒な仕事である。2列のラベルに住所を入れるには、最初の行にAの住所とBの住所を入れなければならない。次の行も同じ、Aの氏名とBの氏名も同じ行になる。そこで差し込む文書は2列のラベルだと次のようになる。

108✓

223✓

港区三田 2-15-45✓

横浜市港北区日吉 4-1-1✓

三田山マンション✓

日吉が丘コーポ✓

慶應太郎✓

日吉慶子✓

このように2件分の住所を一つの単位として文書作成しなければならない。1枚のラベルに4行印刷し、400件の住所なら1600行の文書となる。これは住所の更新などはちょっと面倒にはなる。ともかくこうして2種類のラベルを有効に利用することができたし、宛名印刷することが可能となった。

ちょっとこだわって工夫した使い方の例をあげてみた。なお、袋綴じ印刷や段組み印刷の機能を使ってラベル印刷することも可能であることをつけ加えておく。

(教職課程センター事務長)

# 江戸時代の貨幣

白石 克

(三田情報センター特殊資料担当課長代理)

本館所蔵古貨幣類は昭和15年(1940)に野間左衛門氏(講談社社長清治氏未亡人)より寄贈された古貨幣コレクション約270余点(第1~6図)と、元館長・野村兼太郎博士が蒐集された、藩札・旗本札等紙幣類約230余点を中心となっている。本稿ではこの二つのコレクションの紹介と、併せて江戸時代の貨幣の一般について触れていきたい。

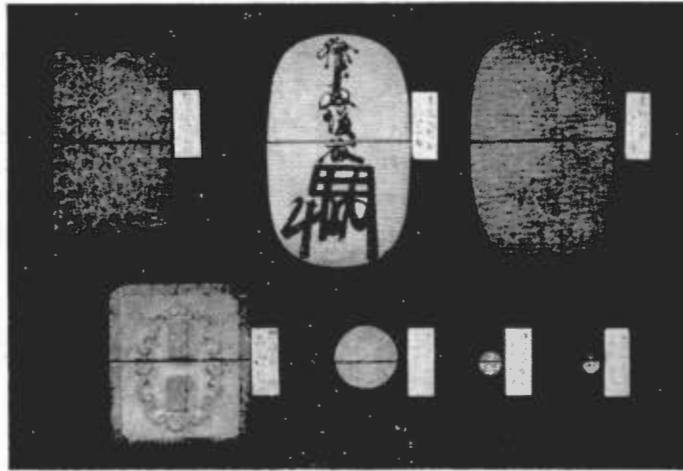
江戸時代は、金・銀・銭の三種類の貨幣、更に限られた範囲(主として所領内)で使用された、現在の紙幣にも類似した藩札・旗本札・公家寺社札・伊勢羽書・町村札・私人札が発行されていた。当時はこのように各種の貨幣が流通するという、非常に複雑な通貨システムであった。金・銀・銭は幕府が発行する貨幣であるので、いずれも本位貨幣で、どれが補助貨幣というわけでもない。金貨は一両や二分のように、額面のわかる名目(計数)貨幣で江戸を中心として流通していたが、銀貨は銀百匁(375g)のように目方をその都度計測する秤量貨幣で、大坂を中心としていた。金貨や銀貨は主として高額の取引に用いられていたのに比べ、銭形平次の投銭で現代人にもなじみのある銭貨は、関東・関西を問わず各地で使われ、小額を支払う日常生活に用いられていた。三種の貨幣が流通するためには相場ができ、相互交換比が決められねばならない。現在、テレビニュースや新聞紙上ににぎわす“円高・ドル安”“円安・ドル高”にみる外為市場と同様の変動相場が、国内でも絶えず行われていたのである。江戸時代初期は“金一両=銀五十匁=銭四貫(4,000文)”であった。中期以後になると、金一両は銀六十匁・銭六貫(6,000文)程度の交換比となったが、その

比率は常に変動していた。江戸後期、大型の日用便覧書として度々刊行された「永代節用無尽蔵」や同類書を見ると‘金相場早割付’があり、“金一両六十八匁 一分十七匁 二朱八匁五分”のように金銀交換値の表が記載されているので、当時の日常生活に全く無縁なものでもないようだ。

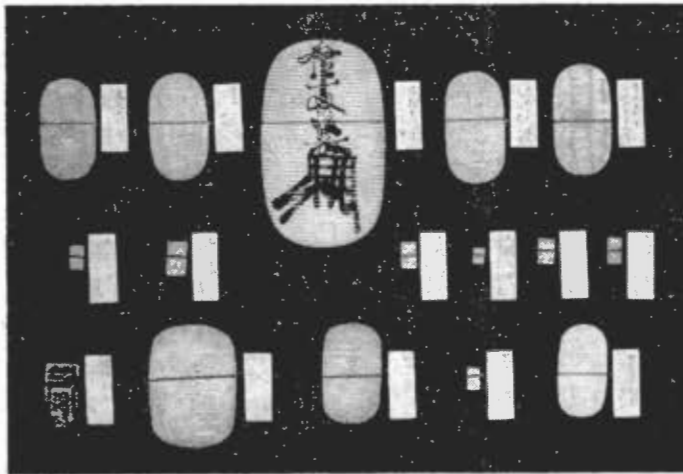
次いで、江戸時代に発行された各種貨幣を簡単に述べていきたい。

金貨は一両=四分=十六朱(一分は四朱)の換算比。発行された貨幣は大判(十両)・小判(一両)(天保に五両)・二分判金・一分判金(銀)・二朱判金(銀)・一朱判金(銀)等がある。銀は丁銀(なまこ銀)が重量四十三匁(約161g)前後。更に、小さい豆板銀(つぶ銀)が小出しに用いられた。銭貨は寛永より幕末まで度々作られた寛永通宝が主要貨で、銅貨(後期には鉄や真鍮も)である。一文銭と四文銭(裏に波が彫られている波銭)の2種がある。天保通宝(天保銭)は1枚百文、銅・錫・鉛の合金で黄銅色である。その他に通商期間の短かった宝永通宝(十文)と文久永宝(四文)がある。この他に、性格の違う金・銀貨の統一化を考えて作った銀貨がある。田沼意次が老中(明和)の頃、銀塊の銀ではなく、定位貨として明和五匁銀(12枚で金一両に交換、一年で中止)や、名目銀(秤量ではなく)として南鑛二朱銀が作られた。しかし、その後も統一できないままに明治に至り、ようやく金本位として統一された。

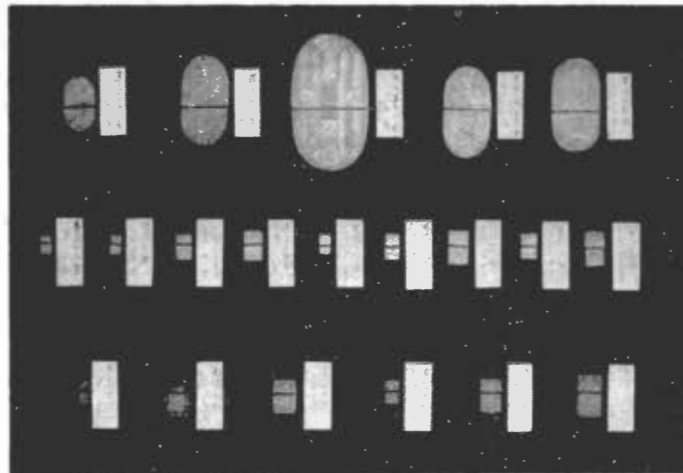
金・銀・銭の交換比率と種類に次いで知りたくなるのは、現在のいくらに相当するかである。江戸時代と今では、諸物価の基準が全く異質である。更に上記の三貨の他に、通用範囲を限定して作られた紙幣類も流通するという複雑な通貨制度



第1図 野間コレクション 享保大判, 甲金等



第2図 同 安政大判, 慶長小判, 慶長一分金等



第3図 同 天保五両判, 文政二分金, 文政二朱銀等

の社会であるので、両時代の価値を比較することは、ほとんど不可能である。こういう事情があるものの、米価を基準に現在との比較をしてみよう。米10kgを5,000円として考えると、一升は約1.4kgであるので一石は70,000円となる。江戸時代には一石を一両とすることが多い。一石＝六貫(六千文)で換算すると、百文は1,167円(約1,200円)に相当する。当時二八そばという、今でいえば立喰そば式の簡単な食事があった。そばが2割で8割がうどん粉という説もあるが、一般には $2 \times 8 = 16$ 、すなわち十六文で食べられたためといわれている。いずれにしても安価であるということには違いがない。今の立喰そばのかけそばは、大体200～250円位である。また、多摩川を渡る六郷の渡し賃が幕末で十三文程であった。現在の都バス料金は160円で、それに船を操る分を水増しし仮に200円としてみよう。いささか遊びになるかもしれないが、二八そばと渡し賃から換算すると、天保から安政(1800年代中頃)の百文は大体今の1,500円に相当することになる。政府関与の今の米価計算より、この方が面白そうだ。現在東海道の旧宿場にある記念館等で基準としている相当額は百文を1,500円とすることが多いので、この1,500円は的はずれではなさそうだ。そこで、これに基づいて当時の貨幣との対比をしていきたい。銭貨からみていくと、一文は15円、四文は60円、一貫(千文)は15,000円、一疋(二十五文)は400円弱となる。金貨をみると、銭六貫程で一両になるので、 $15,000 \times 6 = 90,000$ 、すなわち一両小判(いわゆる小判)は9万円、ほぼ10万円とみてよいかと思われる。一分は一両の $1/4$ なので25,000円、一朱は一分の $1/4$ で一両の $1/16$ なので約6,000円になる。銀をみると一両は六十匁に相当するので、十匁は一両の $1/6$ で約16,000円、銀含有量により差もあるが、なまこ形の丁銀は四十三匁前後あるので、一両の約 $2/3$ で、二分三朱、銭で四貫、概ね6～70,000円ほどとなる。以上はごく大まかな換算であるが、これでもテレビの時代劇をみる時には役に立ちそうだ。

貨幣のごく大略を述べたので、次いで本館所蔵の古貨幣類を紹介したい。

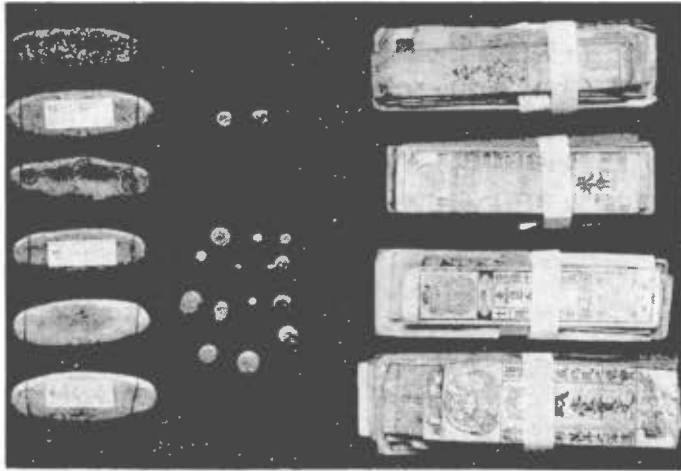
本館で中心となるものは野間家寄贈の古貨幣コレクション(第1～6図に掲載)である。全六段に分けられた黒漆塗箱に納められ、金・銀・銭・コインの貨幣形体が一目で見られるように作られている。以下、全270余点の内容を簡単に紹介したい。

金貨：大判(十兩)(第1・2図)は、享保・万延の2種。小判(一兩)(第1～3図)は、慶長(良質で量目四匁七分六厘、品位は千分中金846.1・銀153)・元禄(「元」と刻)・宝永(「乾」と刻)・正徳(後期)・元文(「文」と刻)・文政(草書で「文」と刻)・天保(「保」と刻)・安政(「正」と刻)・万延(小型でヒナ小判)の全9種。二分判金(第2・3図)は、文政2種(文政元年新鑄の真文二分金・文政11年改鑄の草書で「文」の刻印ある草文二分金)・安政・万延の全4種。一分判金(第2・3図)は、慶長・元禄(「元」と刻)・宝永(「乾」と刻)・正徳(後期)・元文(「文」と刻)・文政(草書で「文」と刻)・天保(「保」と刻)・安政(「正」と刻)・万延の全9種。二朱判金(第2・3図)は、元禄(「元」と刻)・天保(「保」と刻)。銀で作った判金(第3図下段)は、明和南鑄二朱銀・文政南鑄二朱銀・文政一朱銀・天保一分銀・安政一分銀・安政一朱銀。

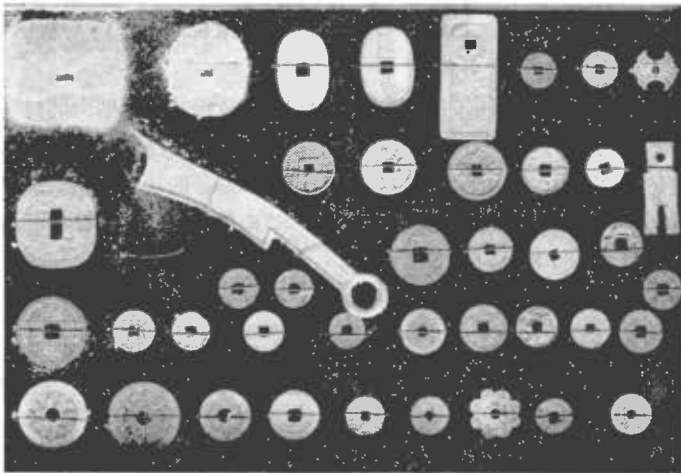
銀貨(第4図)：丁銀(なまこ銀)は、文政(草書で「文」と刻)2個・天保(「保」と刻)2個・安政(「政」と刻)2個の全3種。豆板銀(つぶ銀)は、元文(「文」と刻)14個・文政(草書で「文」と刻)2個・天保「保」と刻)16個・安政(「政」と刻)24個の全4種。

甲金(第1図 甲府にて改鑄)：享保12年一分金(裏に「定」と刻)・享保6年二朱金(裏に「重」と刻)。

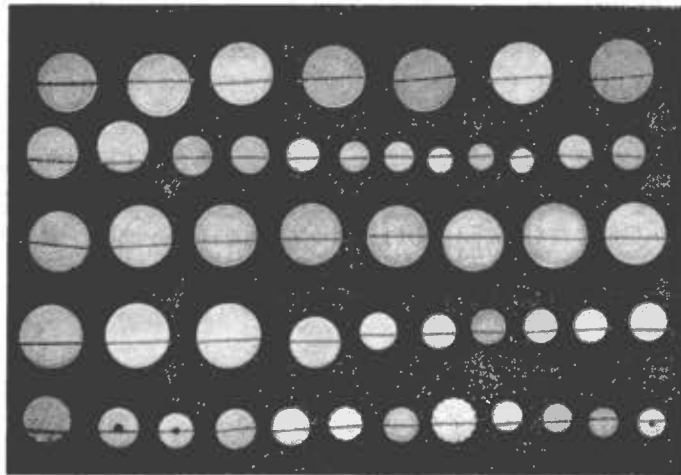
この他(第2図下段左3点)：明和五匁銀・文久秋田九匁二分(一兩)銀判・同四匁六分(二分)銀判。



第4図 野間コレクション 丁銀, 豆板銀, 藩札等紙幣類



第5図 同 寛永通宝等銭貨



第6図 同 コイン類

銭貨(第5図)：寛永通宝一銅銭4個(波銭1)・鉄銭2個(波銭1)・宝永通宝・天保通宝・琉球通宝・文久永宝・文久鑄銭(秋田 百文)・文久銅山至宝(秋田 百文)・文久細倉当百鉛銭(仙台)・生産局鉛銭(米沢 二百文三十四匁)・開元通宝・熙寧元宝・宣和元宝・永楽通宝(銀銭)・順治通宝・咸豊通宝・咸豊重宝・光緒通宝・常平通宝・政味通宝・刀貨・貨布等。

紙幣類(第4図)：関西で発行されたものが多いので、銀札(匁単位)がほとんどである。野村兼太郎氏のコレクション所収品等と比較してみると、何枚もの紙幣をひとつの版木(或いは銅板)で刷り込み、裁断して使われるので、別版のものが多いことがわかる。記述が繁雑になるので、本稿では枚数のみを記した。1枚は枚数を省略した。年記のあるものが多いが、発行の年でないものも多い。枚数と同様に年記のみを記し、詳細は省略した。

① 藩札：大和郡山(一貫文札)・大和柳本(天保9年一匁 2枚)・和泉岸和田(享保15年一匁)・摂津麻田(一匁)・丹波亀山(十匁、一分)・丹後宮津(五匁)・若狭小浜(寛政10年米二升一銀一匁)・紀伊和歌山(一匁)・伊勢津(一匁)・美濃大垣(享保15年五匁)・阿波徳島(淡路)(享保15年一匁)・播磨明石(寛延3年十匁、一匁)・備前岡山(享保15年一匁)・備中足守(享保15年三分)・備中新見(享保15年五匁、大江連島一匁)・備中庭瀬(永楽銭十文)・安芸広島(明和1年五匁)・因幡鳥取(享保16年一分)・出雲松江(一匁)・讃岐高松(天保3年一匁)・伊予松山(宝暦12年一匁)・伊予大洲(十匁)・土佐高知(慶應2年一匁、同二匁、百匁 2枚、五十文)・筑前福岡(嘉永3年十匁)・久留米(一分)・豊前小倉(一匁)・豊前小倉新田(安政5年米三合三十銭)・豊後岡(明和2年五分)・日向延岡(五分)・薩摩鹿児島(元治1年百文)・対馬厳原(肥前田代 一匁)。

② 旗本札：大和両村(三好氏 一匁)・三河長沢(松平氏 享保15年一匁)・但馬糸井(京極氏一匁)・播磨佐用(松平氏 五匁、二分、文政6年一匁、同一分)・備中津寺(榊原氏 三分)。

③ 公家・寺社札：山城裏辻家(慶應2年一匁)・山城安井宮(慶應2年一匁)・山城竹内御殿(慶應2年一匁)・山城御室御所(慶應2年三匁)・山城南殿(五貫文)・大和雙松御殿(修南院)(一匁 2種)・大和興福院(一貫文)・大和満願寺(一匁)・河内壺井八幡宮(一匁)・河内金剛山(一匁)・紀伊高野山(安政2年一匁)・大徳院(一匁)・豊前宇佐神宮(六十四銭一匁)。

④ 伊勢羽書：松坂羽書(三井組 一匁、三分)。

⑤ 町村札：但馬谷村(慶應4年五百文)。

⑥ 私人札：播磨加西郡中野村三宅弥太夫(一匁)・播磨網干村(六分、十匁の2種)・播磨粟賀川口屋・備前屋(文政5年一匁)・豊前行事村館屋(天保6年一匁)・豊後国東生田屋伊兵衛(十匁)。

⑦ 貨銀札：播磨大門村(一匁)。

⑧ 明治：為替会社(大坂 明治2年一匁)・通商司為替商社(東京 三匁七分五厘)。

この他に銀銭手形2種がある。

コイン類(第6図)

① 日本：一円(明治3・21・29・36・39・45年)・五十銭(明治4・31年)・二十銭(明治4・6・40年)・十銭(明治3・6年)・五銭(明治1・3・6・23・38年)・貿易銀(明治28年)。

② 外国：中国 光緒元宝(一銭四分四厘)・同(七分二厘)・一円。朝鮮 一両・半圓(光武10年)・五銭(光武9年 2枚)・二銭五分(光武2年 2枚)。香港 10セント(1868)。セイロン 25セント(1910)。インド 1アンナ(1912)。イギリス 貿易銀1円(1902)。フランス 5フラン(1826・1832・1849 2種)・25サンチーム(1922)・同(1923)・10サンチーム(1924)・5サンチーム(1924)。ドイツ 10ペニヒ(1901)。イタリア 2リラ(1924)。ロシア 25カベック(1858)。スペイン 8レアル。メキシコ 8レアル(1863)・1ペソ(1872)。ペルー 1/5 ソル(1866)。パナマ 50バルボア(1904)。

野村兼太郎博士は日本経済史を専攻していたの

で、現在の信用貨幣の先駆とも考えられる江戸時代の紙幣類を数多く蒐集した。以下大略を記す。

① 藩札：大和芝村（延享2年一匁 4枚，他1枚）・大和柳本（寛政8年一匁，天保9年一匁）・大和柳生（文化12年一匁）・大和田原本（文化5年一匁 2枚）・大和郡山（一匁）・摂津三田（嘉永7年一匁）・摂津高槻（明治1年一匁，同2年百文）・摂津尼崎（額面不詳）・丹波柏原（享保16年一匁）・丹波山家（五匁）・但馬出石（享保 十匁）・紀伊和歌山（一匁，明治 百文，一匁）・伊勢大坂（一匁 6枚，三分，一匁 2枚）・播磨明石（寛延3年一匁）・播磨姫路（一分 2枚，一匁，一匁一大坂中之島 2枚）・播磨赤穂（享保15年五分）・播磨三日月（文久2年一匁）・備前岡山（享保15年一匁）・備中足守（享保15年一匁）・備中庭瀬（慶應1年一分）・備後福山（天明2年一匁）・安芸広島（明和1年五匁 2枚，同一匁 3枚）・出雲松江（一匁文）・周防山口（安永 十匁 2枚，五匁 2枚，三匁，一匁，五分，四分 2枚，三分 2枚，二分）・阿波徳島（淡路 一匁，一匁文）・伊予宇和島（宝暦10年二分）・伊予大洲（延享3年一匁，同二分，慶應4年百目）・土佐高知（一匁目 2枚，百匁 2枚，三十匁，十匁 2枚，三匁）・筑前福岡（嘉永3年十匁）・豊後杵築（御分知 文化 額面不詳）・対馬厳原（肥前田代二分）・伊勢津（安永4年一匁，文化11年一匁 3枚，同五分，同三分2枚）・伊勢龜山（備中飛地 一匁）・伊勢桑名（一匁 3枚）・志摩鳥羽（一匁 3枚）・上総飯野（一匁）・武蔵忍（慶應2年

一匁）・常陸水戸（安政6年一匁）・上野高崎（二百文，百文）・上野伊勢崎（五匁文 3枚，二匁五百文 2枚，一匁文 2枚，五百文 2枚）・陸中盛岡（天保6年 二百文，同百文，同二十四文 2枚）・陸前仙台（一匁 4枚，一匁文，三十文）。

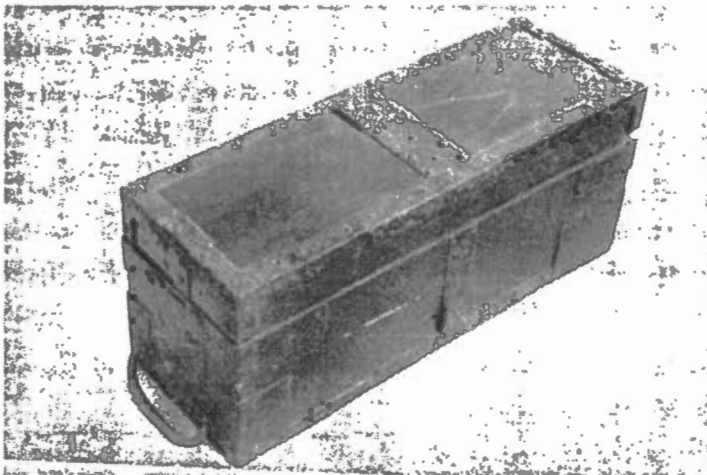
② 旗本札：大和福地（畠山氏 天明2年一匁）・大和大福（曾我氏 慶應3年三分）・播磨佐用（松平氏 文政6年一匁，同一分）・近江大森（最上氏 弘化4年一匁 7枚，同五分 3枚）・三河長沢（大和 享保15年一匁 2枚，同三分 2枚，同二分 2枚，河内 一匁）。

③ 公家・寺社札：山城嵯峨御殿（文久1年一匁）・山城御室御所（一匁）・山城実相院（一匁）・大和雙松御殿（修南院）（一匁 2枚）・大和満願寺（一匁 3枚，五分，三分 2種）・大和興福院（慶應2年一匁）・大和喜多院（五匁，一匁，二分）・大和鑑蓮社（一匁）・河内金剛山（慶應1年一匁）・和泉浅香宮（万延1年五百文）・紀伊高野山大徳院（一匁 2種7枚）。

④ 町村札：大和西辻（一匁 3枚）・大和池尻（一匁 3枚）。

⑤ 私人札：京都石田清輔（一匁，二分）・大和米屋半兵衛（五分，二分）・播磨加西郡中野村三宅弥太夫（文久3年錢一匁）・播磨完栗網干本屋亀屋（錢一文目）等全9種。

この他、日備手形・人足切手 15種23枚，宿場札（三河御油等）4種5枚，太政官札 2種5枚，通商司為替会社札 4枚，米札 5枚，銀錢手形 3種4枚がある。



千 両 箱



## 志想, 思想, 視想

北 洛 師 門

想という字は、なかなか味わい深い字である。この字は、文字通り相と心からできた字で、元々心の中に相を描くという意味である。もう少し詳しく述べると、相はこれも文字通り木を目でみることからできた文字で、この字には元々絵のイメージがある。辞書によっては音の意味もあると書いてある。発想、想像、空想など想がつく言葉は多く、イメージを惹起させるような言葉が多い。

一方、思という字は、頭脳と心臓を働かせるという意味からきているとある辞書に書いてある。こちらは、まさに物理的にもうという行為そのものを指しているようで、思索、思慮、思考など想の場合とは違って、ちょっと堅い感じで、大脳がちゃんと働いていないと駄目という感じを与える。要するに理詰めで考えるという感じである。ある言語学者は、思考は言語を通して行なわれると断言しているが、想がつく言葉の行為は言語の介在なしでできそうである。昨今の右脳・左脳の議論に託けて言えば、思は左脳で想は右脳と言うところか。

最近人間の脳に関する研究成果に神経回路網に関するものがあるが、この研究成果がニューラルネットワークとかニューロコンピュータの世界で花を咲かそうとしている。これは、コンピュータに思の能力だけでなく、想の能力も持たせることになるかもしれない。

仏教の五蘊の教えでは、人間を形づくっている物質・精神が色(=肉体)、受(=感覚)、想(=想像)、行(=心の作用)、識(=意識)の五つに分けられているが、ここでも想が用いられていることは興味深い。逆に考えると、東洋人は思が苦手なのかも知れない。哲学は思の世界で、禅は想の世界のような感じがする。

このような思と想の二つの文字からできた思想もなかなか味わい深い感じがしてくるから不思議だ。

思想の意味を改めて辞書で引くと、統一ある判断体系とか人生・社会に対する見解とか書いてある。思想といふとかなり堅苦しい感じがするが、思と想が一緒になったと思うと自然に受け入れられる。統一ある判断体系や見解には思と想のバランスが大事なのだとかなってな解釈もできる。要するに実体に理詰めで迫ることも重要だが、パースペクティブに見ることも必要だと言うことか。

よく何事にもフィロソフィーが大事だなんていうときに使われるフィロソフィーと言う言葉は結局上記の意味の思想という言葉に他ならない。思想は我々が物を考えたり、見たりするときに役立つ体系だと言える。言い換えると、大脳で行なう情報処理に役立つ体系である。

人間いくら素晴らしい思想をもっていても志が低ければその思想を活かせないだろう。また、自分を客観的に見る目が無ければ自分の行為をチェックできないし、思想を改善することはできない。そこで考えたのが、三つのし想、志想、思想、視想である。実は、ある作家が視想への旅という本を書いており、この言葉を拝借し、さらにこれにヒントを得て考えたのが志想という言葉である。

志を想い、思って想い、視て想うことは、何事にも重要である。研究にもこの三つのし想が必要である。私の専門の制御工学においても目標、コントローラ、センサーの三要素が基本である。我田引水であるが、これらは志想、思想、視想に対応する。また、これら三つのし想それぞれが大事だが、それらのバランスも重要である。いくらよいコントローラがあっても、よいセンサーが無ければよい制御システムを作ることはできない。

私は、これらの三つのし想が重要で、そのバランスが大事であると学生さん達に昔から説いてきた。昨今のゆとりの時代には、詩想の心も重要だと言わなければならないか。これで文字通り四想になった。

(理工学部機械工学科助教授)  
吉田和夫

## 選書情報の活用

市古健次

(三田情報センター選書課  
兼情報サービス担当係主任)

### I. はじめに

選書課には毎日、内外の出版社、書店のカタログが届けられる。出版社、書店の選書情報は図書を選定ばかりでなく、様々な形で活用されている。そこで選書情報を整理し、その活用例に焦点を当てて見ることにする。

### II. 選書情報の種類

図書を出版・流通の側面から見ると、出版されて間もない新刊書、出版されている既刊書、出版予定にある近刊書、古書、リプリント版やマイクロ資料がある。そうした資料の情報は、出版社のカタログ、書店の新刊ニュース、取次店や出版者協会による出版情報誌、「日本書籍総目録」や“Books in print”などの市販情報、古書店カタログ、“Guide to reprint”, “Guide to microforms in print” から入手することができる。

出版・流通情報のほかに、選書情報として有効な多種多様な工具が図書館・キャンパスに散在している。それは機能的に選書を目的にしているが、広義に選書情報と見ることができる。一匡の出版物を羅列してある全国書誌、文献探索を目的に編集された主題別文献目録、蔵書目録、入門書の巻末に掲載してある「参考文献一覧」は、図書館のレファレンス・ルームや一般書庫に排架されている。図書館から出ても、選書に関わる情報が教務課と大学生協にある。『履修案内』には科目毎にテキストと参考文献が掲載されている。さらに生協が独自に教員からテキスト・参考文献の情報を収集して編集した『教科書一覧』がある。

こうした選書情報は、印刷体から、オンライン、CD-ROM までに及び、情報源におけるメデ

ィアの多様化が進んでいる。選書課には“Books in print”等の CD-ROM、書店の洋書在庫情報が検索できるオンラインの端末機と、古書などの書誌事項を確認するのに有効な学術情報センターの端末機が設置され、印刷体とは異なる検索が可能になってきている。そして出版・流通・非流通の選書情報は様々な形で活用されている。

### III. 選書情報の活用

#### 1) コレクション・デベロップメント

図書館は学生向けの和書と洋書を選定している。その選定方法は、現物を実際に見て購入の判断を行う見計らいと、毎週刊行される取次店の情報誌による注文である。経常的な選書、すなわち図書館における「メイン・コレクション」のほかに、授業・カリキュラム関係の選書、稀観書、原資料などの選書を行っている。

授業・カリキュラムで指定されたテキストや参考文献は大学生協の『教科書一覧』で選定し、さらにゼミ、研究会に選書の側面からも援助している。三田ではゼミ単位のビブリオグラフィック・インストラクション（文献探索を中心とした利用指導）を行っている。学部、学科、ゼミによって異なるが、3年次には基礎的、古典の文献を講読し、そして4年次に卒業論文を書く。文献講読に用いる文献は、各学部のゼミナール委員会が編集した入ゼミ案内である『研究会紹介』に掲載されている。基本的で時代を超越して読まれる、いわば「コア・コレクション」というべき選書は、授業・カリキュラムと図書館との有機的結合に不可欠なものである。

次に稀観書や原資料については希少価値性や学術性などの判断が必要な上、高額なために主に「教員推薦」という形を取って購入している。稀観書の場合、内外の古書店カタログの著者、書名の記載の仕方が、図書館のそれと異なるため、事前発注調査はかなり時間を要する。そのために出版・流通、非流通の選書情報は稀観書の典拠・同定の手掛かりにもなる。

一定の規模の図書館になると、議会資料、政府刊行物、外交文書、法令・判例、統計、古文書の資料の購入額が増える。多くの研究者から購入希望がある資料、学際的な資料であるなら、その資料の購入は図書館における「原資料コレクション」に大きく関わる。地域性、時代性、学際性などコレクション体系を考慮してコレクションの構築を計り、研究に応える選書が必要である。

## 2) 教員への情報提供

教員は主に学部図書を選定と、「図書館推薦」による学部生向けの図書や研究書を選定を行っている。選書方法には書店の新刊・古書カタログなどの選書情報による注文と、見計らいがとられている。洋書の場合、従来のように行われてきた規模の大きな見計らいが書店の事情によって困難な状況において、注文への依存傾向は高い。したがって教員への選書情報の提供が重要となる。書店と異なり、図書館では限られた情報提供しかできない。そのため一部であるが、選書課に届く海外の出版社、古書店カタログのうち、ある分野の特集カタログであれば、その分野の教員に選書情報として活用してもらっている。

選書情報を提供するには、図書館員が『履修案内』や『慶應義塾報』に掲載される「学事振興資金」による研究テーマを見て、研究動向の把握をすることが前提となる。的確な選書情報を教員に提供し、それによって図書館・学部のコレクションをより一層充実させることができる。

## 3) コレクションの評価

経常的なコレクション・デベロップメントの評価には一定の歳月が必要である。概して新刊書は、新しい研究成果を知り得るので、よく利用される傾向が強い。反面、貸出回数が多い図書が優れた図書とは言えない。出版されて20年以上たつ新書、丸山真男の『日本の思想』や中根千枝の『たて社会の人間関係』は新刊書に比して利用は少ないが、一定した出版、利用がなされている。プラトン、シェークスピア、ルソー、マルクスの著作は「古典」と呼ばれるように絶えず読まれて

いる。人物についての研究書も絶えず出版され、読まれている。しかし研究書はその時代の関心によって書かれるので、後世になってすべて第一義的に読まれるわけではない。時代を超越する研究書、「名著」、「全集」がコレクションの中に入っているかをチェックする事が図書館の重要な仕事である。それがコレクションの評価であり、評価の一工具として選書情報、とりわけ主題別文献目録、文献案内、入門書の巻末にある「参考文献一覧」が利用できる。

ところで、日本の大学図書館は一館で学習、教育、研究の支援、知的関心の向上、知的遺産の保存などの多機能を担っている。その中でも稀観書においては米国図書館環境と比較できない。カリフォルニアのハンチントン、ニューヨークのモーガン図書館のように大富豪、或は寄付によって創られた、所謂「稀観書の図書館」は、日本には余り存在しない。インディアナ大学のリリー図書館のような図書館もない。書誌学、知的遺産の保存という観点から稀観書コレクションの構築は、大学図書館における重要な機能の一つである。稀観書の展示は知的関心への向上につながる。

高価な稀観書については、大学図書館は「図書の博物館」ではないため、予算、蔵書数などの比率を考慮しながら、購入していくことが必要である。稀観書を選定する際に参考になるのが、稀観書関係の目録、古書店のカタログや展示カタログである。一定の評価を得た選書情報であるなら、それは選書と評価の有力な手掛かりになり得る。

## IV. 終わりに

学問分野が細分化・深化された現在、研究を対象とした学部コレクションにおいて、各分野の図書のバランスをとりつつコレクションを構築していくことには様々な面で困難が伴う。一方学習・教育を重視した図書館では、多くの授業・カリキュラム、ゼミ、学生の関心のあるテーマ・トピックスなどのバランスがとれたコレクションの構築が望まれる。そのために選書情報の整備と充実が

必要とされる。

多くの選書情報が散乱している中で、選書情報を活かすのも「選書方針」の存在である。残念ながら、日本の大学図書館には明文化された選書方針は余り確立されていない。当センターもその例外ではない。慣習的な、或は引継事項として選書方針に関わる情報の蓄積がある。その条文化によって米国大学図書館において充実している「選書方針」「選書基準」を決めていくことが可能である。確立された「選書方針」「選書基準」に沿って様々な選書情報を活用してコレクションの質的充実を計っていく考えである。

## 理工学情報センターの蔵書を作る

——理工学部50周年を中心に——

森 園 繁

(前理工学情報センター副所長)  
(現日吉情報センター副所長代理)

### I. はじめに

平成元年3月日吉キャンパスに新しい課外活動棟が完成した。端正な建物を中心にして、学生のクラブ活動が活発に展開されて行くことであろう。一方、日吉の歴史を繙くとちょうどこの活動棟の辺りで、昭和14年6月19日に、藤原工業大学の開校式が晴れやかに行われたことを、教えてくれる。藤原銀次郎氏が私財を投げうって創設した工業大学で、機械、電気、応用化学の3学科であった。のち昭和19年藤原工業大学は、慶應義塾に寄贈され、慶應大学工学部として再発足する。年移り半世紀、平成元年は藤原工業大学より数えて50年一すなわち慶應大学理工学部50周年である。

理工学部では50周年を祝して、記念事業が実施されたが、その2つの柱は、

- (1) 大学院理工学研究科に3専攻(計算機科学、物質科学、生体医工学)を新設する、
- (2) 総合科学研究センター棟、厚生棟などを新

設する、

であった。理工学情報センターはこの2つともに関わっており、(1)では、3専攻新設にともない図書整備が実施され、(2)では、厚生棟地下1階に書庫(122坪、図書収容能力8万冊)が建設された。この小文では、蔵書整備がテーマであるので、書庫の増設については、これ以上触れないが、理工学情報センターと廊下で結ばれた新設書庫は、書架の少なさに常に苦慮を強いられている担当者には、念願の朗報であったことを書き留めておきたい。蔵書の整備と書庫の整備は並行してこそ、利用に即応したサービスが、望めるからである。

さて、新設3専攻を機に、蔵書の整備が促進されたのは事実であるが、より良いコレクションの構築を図るのは、もちろん今回の専攻増設に限られず、理工学情報センターの仕事として日常のことである。が、数年の単位で見ると、おのずから節目があり、“蔵書を作る”いわゆる Collection Building が、平年より倍加される年がある。この50周年を機会に、そうした年を簡単に跡付けて、それから今回の3専攻の選書に触れてみたい。

### II. 今までを振り返る

#### (1) 理工学情報センターの発足

第1回目は、言うまでもなく小金井の工学部図書室が、現在の矢上台キャンパスに移転し、組織上も理工学情報センター(松下記念図書館)と命名され、スタートした時である。昭和46年10月のことで、学科はまだ5学科(創設時の3専攻に計測工学、管理工学)であった。小金井時代の所蔵45,762冊に較べると、1.3倍59,102冊で、諸設備の充実さをも加えて、まさに隔世の感であったろう。日本科学技術情報センターからの移管雑誌の整備も進み、以後昭和53年まで継続的な受入れが始まったのは、一大特色である。

#### (2) 数理工学科

第2回目は、数理工学科(現在の数理科学科)が昭和49年4月に新設された時、昭和48~50年に

かけて数学関係の単行書、雑誌が大幅に整備された事である。特別予算で単行書2,300冊、雑誌150タイトルの購入が計画された。整理された資料は、理工学情報センター内に配架されず、別棟の数理工学科図書室に置かれ、現在に至っている。理工学情報センターの特別予算で基礎を作った数理コレクションは、以後は数理工学科の予算で購入を進め、最近では単行書7,800冊、雑誌310タイトルと成長している。

### (3) 物理学科、化学科

第3回日は、昭和56年4月物理学科と化学科が増設されるのを機会に、両学科関係の資料が整備された時である。昭和55・56兩年にかけてで、やはり特別予算で、単行書3,951冊、雑誌154タイトルが購入された。また両学科の誕生で、藤原工業大学創設時の3学科は現在の8学科と増え、理学関係の学科開設により、工学部も理工学部に改組された。

### (4) 計算機科学、物質科学、生体医工学

そして、第4回日は理工学部50周年記念事業としての、新設3専攻で、現在蔵書整備が進行中であり、解説は後に譲る。

ここ18年間の蔵書数と利用対象者（3年生以上の学生及び教職員）の伸び率を対比してみるには、図1が役立つであろう。昭和46年の所蔵59,102冊、利用対象者1,835名をそれぞれ原点におくと、図書を取りまく教育環境が、約2倍に改善されているのが読める。

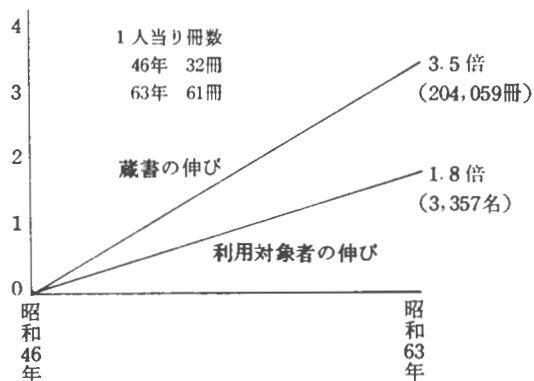


図1 蔵書数と利用対象者の伸び

## III. 生体医工学とは

さて、大学院理工学専攻科の新設3専攻であるが、計算機科学 (Computer Science)、物質科学 (Materials Science) は、実際には既存のコレクションが活用でき、今後とも補充を行えば良いのであるが、生体医工学 (Biomedical Engineering) がどういう内容であるのかは、調べてみないと理解しにくい。学問である以上、名称にこだわらない訳には行かないが、どうも生体医工学という専攻は、日本の大学では唯一であるらしい。今回文部省への申請の際も、何故医用工学 (Medical Engineering) でもなく、生体工学 (Bioengineering) でもなく、生体医工学でなければならぬかを、文部係員に説明するのに、50周年事務当局の方は腐心された、と聞く。

そもそも、医学と工学との関わりを見直すと、MEという言葉が登場したのは、昭和30年代であろうか。医学 (M=Medicine) に、当時進歩の著しかった電子工学 (E=Electronics) を応用した医療分野を表した言葉であった。その後、電子工学のみならず機械工学、化学工学、材料工学など広く工学の諸技術も医療に用いられるようになり、MEのEは工学 (Engineering) を意味するようになる。

またこれと反対に、医学や生物学の知識を工学に応用する学問も生まれ、バイオニクス (Bionics = Bio+Electronics) と呼ばれるようになる。

こうした工学と医学と生物学の関連した領域を総称して生体医工学、生体医用工学、英語ではBME (Biomedical Engineering)、MBE (Medical and Biological Engineering) などの名称が用いられるようになる。名前が一定せずまぎらわしいのも、この学問の新鮮さを感じさせるが、内容もそれに比例して、固定したものよりも、むしろ流動的な方が望ましいかも知れない、との声もある。かくて、医学に比重が移る医用工学でもなく、工学に重点が置かれる生体工学でもない生体医工学は、理工学部と医学部の接点を覆う学際領域の学問である。

講義の幾つかをあげると、遺伝情報学、医用画像工学、医用情報工学、感覚の分子機構論、心理工学、生体計測工学、生体輸送現象論、生体システム論、などとなっている。

#### IV. 実際に選書する

そこで、資料を取書するには、対象とするテーマに深い知識があり、かつ周辺領域への目配りが必要とされるし、今回のように、境界領域の学問である場合は、なおさらである。また、既述したような、その分野の知識を抽象的ではあっても把握すると同時に、実際には限られた図書予算で資料の購入を計画し、購入冊数が文部省の認可基準を満たさなければならず、現有スタッフで、ある日時までに整理作業を終了していなければならない、などの付帯条件を考慮すると、おのずから購入データの輪郭がつかめてくる。

大学院に新しい専攻を設けるには、研究教育に必要な図書及び学術雑誌を備えなければならないが、「大学院設置基準」には具体的な数値を掲げていないので、担当者の判断に一任されることになる。ただし、「大学設置基準」で、第40条に次の数値(表1)をあげているので、今回はこのデータを基に、購入予定冊数を算出した。

表1 「大学設置基準」第40条による  
(工・医のみ抜粋)

	図書の冊数	学術雑誌の種類数
工学部	8,000 以上	50 以上
医学部	30,000 以上	300 以上

計算機科学と物質科学専攻については、現在の蔵書でこの基準を充足しているが、生体医工学専攻については、全く不十分であり、新規に選書しなければならないので、検討のすえ以下のような内容の図書増設を、関係当局へお願いした。

図書に関しては、上表医学部数値の1/10=3000冊とし、雑誌については、学術雑誌の重要性を考

慮して、上表医学部の1/3=100タイトルとした。実際には、図書3,000冊、雑誌100タイトルを昭和63年度に約60%、平成元年度に約40%と2ヶ年にわたり実施することとし、その第1年度の終わり、平成元年3月末日現在の取書状況は、図書1,851冊、学術雑誌56タイトルで予定通り完了しており、文部省の認可も無事おている。

これから、秋を中心にして残り図書約1,200冊、雑誌40タイトルの選書、発注、受入れ、整理、配架作業が始まる。もちろん、生体医工学の資料整備はこの2ヶ年で終わるのではなく、ここからが始まりである。

自明のことながら、選書作業は、あるまとまったコレクションを作り上げることである。世の中に散在している資料の中から、有用のものを探し出して、自館の蔵書とするのは、判断力と経験と体力を必要とし、一種の知的ゲームであり得る。その上、受入れ後は現在の20万冊の中に埋没してしまうわけで、それを利用者を利用し易いような蔵書にするには、目録や請求記号の取り方、配架や製本の処理に技術と工夫が要求されるし、カウンターでの適切なアドバイスも不可欠である。

#### V. 選書の資料若干

今回生体医工学の選書を行うのに良く利用したレファレンスブックは、単行書では、洋書については、Scientific and Technical Books in Print (Bowker) 及び米英の出版社9社の販売カタログ(A.R.Liss, Blackwell Scientific, CRC, Cambridge Univ. Pr., Churchill Livingstone, McGraw-Hill, Pergamon, Oxford Univ. Pr., Wiley), 和書では、医学書総目録及び医学書出版社数社の目録であり、著者と書名と数字の連綿とした資料を、幾頁となく読み抜かなければならない。慣れてくると、良書と、これはいただけない、と思われる書とが、大体見えてくる。

雑誌では、特に洋書を中心に調べたが、Science Citation Index (Institute for Scientific Information) の Journal Citation Reports 篇が参

考になった。これは、どの雑誌が世界中の研究者に読まれ、かつその雑誌がどれ位研究者に引用されているか(cited)を、逐一調べ上げたリストである。収録タイトルの基準があいまいなのと、世に何十万とある雑誌を考えると調査対象タイトルの数が少なすぎるのが気にかかるが、アメリカ人好みの数字数字の実績で推して計る良い例であろう。コンピュータで打ち出した、目が痛くなるほど細かい文字と数でページが埋まっているが、それだけ説得力があるように思われてくる。

上のような活字情報である参考書のほかに、専門の教員の助言や推薦が、きわめて有力なのはいうまでもない。特に学術雑誌の適不適は、専門家の意見を正すべきで、カウンターなどでの会話からも、活字では得られない生の情報を聞くこともできる。

科学の世界では、物理学と化学の時代は去り、今や医学と生物学の時代、との世評もある。あるいは医学も生物学も生と死のテーマを中心としており、我々の生活や生命感に直接に影響を与えるので、一層強くそう思われるのかも知れない。いずれにしても、生体医工学の範囲が、人間の生命構造と生物と機械工学との関係に終わるのではなく、根底には生命の倫理や、もっと深く道徳観に立脚して初めて、肉体をも精神をも生かす Bio-medical Engineering の誕生といえるのであろう

か。

その意味で、今回の選書には、生命倫理(life ethics)を扱う図書を努めて入れるようにした。まだ類書が少ないのは致し方ないが、人文・社会科学の分野でもあるので、三田情報センター、日吉情報センターとの関係も出てくる。もちろん、医学情報センターと関係深いのは当然である。人間の生命体を扱うのであるから、人為的な縦割りの学問分類などには関係なく、すべてに関わってくる方がむしろ自然である。

## VI. 終わりに

既存の学問の枠組みでは、捕らえきれない新しい研究テーマが生まれ、その魅力に引かれて学生が研究科に進学してくる。最良のコレクションを建築(build)して、求める資料に手落ちのないようにする。ある書は土台となって喜ばれ、ある書は飾りとなり終わる。書の良し悪しは、歳月が過不足なく決めてくれる。

かくて、資料は教員に学生に利用され、利用した学生は研究の証を、貴重な学位論文として、理工学情報センターに残して行く。そして、学園は再び新しい学生を迎え、その学生も学位論文を残して去り……次の学生も学位論文を残して……理工学部は研究の成果を蓄積し、理工学情報センターはさらに蔵書を深めて行く。

## 情報センター首脳陣の交代

本年10月1日付で各情報センター所長ならびに以下の3センターの首脳陣が交代しました。

研究・教育情報センター所長  
兼 三田情報センター所長  
ならびに 慶應義塾図書館長  
商学部教授 清水龍登(重任)  
日吉情報センター所長  
文学部教授 小長谷弥高

医学情報センター所長  
医学部教授 横山哲郎(重任)  
理工学情報センター所長  
理工学部教授 白井恒雄

日吉情報センター副所長 有居 孝  
同 副所長代理 森園 繁  
医学情報センター副所長代理 天野善雄  
理工学情報センター副所長代理 渡部満彦

## 利用案内検討会の活動報告

松本 和子  
(三田情報センター)  
情報サービス担当

現在利用案内検討会は、印刷体の利用案内の管理と春・夏のオリエンテーション実施の2つを柱に各部署から選ばれた若手職員5名が、毎月1度第3木曜日に定例会を開いて活動をしています。本稿では当会の活動を理解していただくためにこれまでの活動を紹介します、現在抱えている問題、今後の活動についても触れたいと思います。

### I. 活動経過

#### ① 第一期利用案内検討会(1980~1984)

利用案内検討会は1980年新館オープンに向けて図書館利用案内を新規に作成することを目的に作られたプロジェクトチームでした。ジェネラルな情報載せた冊子体の利用案内(以降ジェネラル版と呼ぶ)を新館開館と同時に刊行し、目録、雑誌室、旧館等の詳細な情報載せたリーフレットの利用案内(以降スペシフィックと呼ぶ)はメンバーが中心になり各部署で作成されていきました。スペシフィック完成後はこれらの改訂・増刷などの管理を行う連絡会として定例会が開かれるようになりました。

#### ② 第二期利用案内検討会(1984~)

1984年利用指導に興味のある者が中心にメンバーの大半が入れ替わり、新たにAV資料による利用案内の制作を開始しました。そして出来上がった物の中からスライドによるオリエンテーションの企画、運営も手掛けることになりました。

### II. 活動内容

#### ① 印刷体の利用案内の管理

1989年6月現在ジェネラル版と23のスペシフィックシリーズ(サブシリーズを含め35種)が刊行

されています。最近では『データベース検索サービス』『資料の探し方—雑誌編』英文の利用案内シリーズである“KUL GUIDE SERIES”『慶應義塾大学他地区図書館(情報センター)利用案内』『1階目録ホールに収録されない資料』を新規に作成しました。

ジェネラル版は予算の関係で年に1度しか改訂・増刷ができません。そこでスペシフィックで最新の情報を提供できるよう、従来外注していたスペシフィックを87年以降各関係部署でワーフロへ入力し、内部で印刷することにしました。これにより改訂が容易になり、経費を抑えることができたはずでした。ところが部署によってワーフロの機種が違ふ、図表は入力できないものがあるといった状況で原稿の管理はかえって面倒になっています。加えて現在図書館にある印刷機の性能上の制約から細かい字や図表、両面印刷はきれいに仕上がらない、片面印刷のため縦に手間がかかる等、印刷にも問題が多いことが分かってきました。これらは機械の導入、整備によってかなり解決できると思いますが、その外最近の書庫スペースの減少に伴う書庫移動、機械化、CD-ROM等の導入がスペシフィックの頻繁な改訂を余儀なくしていることも考えると、印刷体の利用案内は全体的な見直しが必要になってきていると思われる。

学部学生のためのスペシフィックとジェネラル版は、1階で全て手に入るよう配布台を置いています。しかし入口付近ではないため利用者が気がつきにくいというのも問題です。もう少し工夫をしなければならぬと思います。

三田のように組織が大きくなると、職員でも、各部署のサービス、利用細則を把握することは容易ではありません。そのためメンバーは利用者へ配布するばかりでなく、改訂された最新の利用案内を各部署で一部保存し、いつでも参照できるようにファイルしてもらっています。そして一つの部署の変更事項が自分の所属する部署のスペシフィックや、ジェネラル版に関連する内容であるか



どうか、常に全体的なサービス・仕事の流れ、既存の利用案内を把握しておくことを心がけています。定期的に会合を開くことによって、部署間の情報交換ができ、利用者サービスへの意識を高めることができていると考えています。

## ② オリエンテーション

1984年から制作を開始したAV資料による利用案内は、85年にはスライドが、86年にはウォークマンによるセルフガイドツアーとビデオによる利用案内が完成しました。これらはジェネラル版に相当する内容で、活字離れ世代といわれる学部学生を対象に、基本的な図書や雑誌の探し方と施設・サービスについて紹介しています。印刷体と違いAV資料は制作するにも、利用するためにも視聴覚設備が必要です。特にスライドは改訂は簡単ですが、利用となると時間と場所を設定しなければなりません。そこで“ライブラリー・オリエンテーション”として毎年学年度始めに集中的に実施し、企画と運営を当会で担当していくこととしました。ウォークマンは、学生が再生機を持っている場合も多いので、貸出用の再生機を1台購入、テープを複数ダビングしレファレンス・カウンターに備え付け貸出し、随時利用できる体制をつくりました。一方残念ながらビデオは撮影機器

があまり性能が良くなかったこと、編集機などもないため出来栄が悪く、86、87年の2年間ビデオファイリングシステムに入れましたが、以降制作・利用とも中止せざるを得ませんでした。

1986年からは閲覧課からの要望で通信教育課程の夏季スクーリングの期間中に通教生を対象にしたスライドによるオリエンテーションを実施しています。表1は1985年以降のAV資料による利用案内利用者（オリエンテーション参加者）数です。

## ③ その他の活動

新館1階にある展示ケースを使って年に何度かの展示を行うようにと上部から指示があり、以下の展示を企画してきました。

「ラフカディオ・ハーン没後80年」(1984)

「福澤諭吉生誕150周年」, 「万国博覧会の歴史」(1985)

「西欧のブックバインディングの歴史」(1986)

「太田道灌と江戸城」(1987)

「哲学・科学思想の古典」(1988)

88年度には新館の『見学案内資料』の改訂も手掛けました。他の活動と並行して行ったため完成までに約1年がかかりましたが、出来上がりは好評で1989年版のみ三田情報センター職員全員に配布することにもなりました。この資料は実際に働く職員の為の利用案内と呼べるものですので、他の利用案内の改訂と連携した改訂を年1回当会で行うことにしました。

## Ⅲ. 今後の活動

当初の活動からその活動の幅を徐々に拡げてきてることがお分かりいただけたと思います。現在の一番の課題は管理に手間のかかる印刷体の利用案内を見直して、効率的に管理でき、なおかつより良い利用案内を作っていくことです。そして1990年から稼動するOPACの端末からアクセスできる利用案内を作ることに着手しています。

利用案内はうまく管理していかないとかえって利用者が混乱したり、カウンターの対応がうまく

	1985	1986	1987	1988	1989
スライド	180	6	14	147	87
ウォークマン	…	15	18	3	*
ビデオ	…	7	10	…	…
スライド (スクーリング)	…	81	29	35	*

注：スライド実施回数 1985年42回、1986年5回、

1987年11回、1988年19回、1989年22回

…は実施せず

\* 未集計、あるいは未実施

表1 AV資料による利用案内利用者数

いかなくなることがあります。しかし利用案内に対する職員の関心は残念ながらあまり高いとは言えません。メンバーは所属する部署の仕事と利用案内の仕事との位置づけに戸惑うこともあります。時期的には、かなり利用案内のために時間をかけなければならないことがあるからです。より良い利用案内を作るために利用者調査を考えた時期や、利用案内の一つとしてサインシステムを見直したいと考えたメンバーもいましたが、実現はしていません。利用案内の活動を利用者だけではなくセンター職員にもPRしていくことも重要な課題だと思われます。



## KULAS 研修報告

安田 博

(研究・教育情報センター)  
本部事務室室長代理

情報センターでは、職員の研修計画の一環として、1986年から、若手の職員に対して、KULAS (Keio University Library Automation System) 研修というコンピュータのプログラミングを中心とした研修を行ってきた。この研修は、将来の情報センターを担う若手職員に、コンピュータに関連した知識、技能を体系的に習得させ、個人のコンピュータに関するスキルを高め、日常の仕事に効率的に運用するためのものである。

これまで、情報センター職員に対するコンピュータについての研修は、塾の人事部が行ってい

る、約2カ月間の新入職員コンピュータ研修と夏季の短期コンピュータ研修との2つがあった。これらは、主に、入門コースで、その後のコンピュータに関連した業務を行う上での基礎となるものである。それ以外に、情報センターでは、コンピュータ関連業務に携わる職員に対して、必要に応じて、適宜、オンザジョブでコンピュータ教育を行い、知識及び技能を高めてきた。しかし、一部の職員だけが、そのような業務に携わっているだけでは、配転や退職時に、すぐ、次の人材を育てることが難しく、どうしても、コンピュータ関連業務に携わる職員の底辺を広げ、拡充しておく必要がでてきた。一方、世の中が情報化社会となり、学術情報センターのようなオンライン・ネットワーク・システム、DIALOG、日経テレコンなどのパソコンを使った情報検索システム、CD-ROM、光ディスクなどの新しい媒体を使った情報検索システムなど、情報のハンドリングに、いやがおうでも、コンピュータとそれに関連した情報機器を取り扱わざるを得なくなってきている。また、技術革新のスピードが非常に速くなってきたことによって、コンピュータに関連した業務の範囲が広がってきており、ある限られた人間だけが、そのような業務を行っているだけでは、時代の変化に対応し難くなってきている。これらのことから、情報センター自身で、職員に対して、現在の業務に則した形でコンピュータに関する体系的な教育を行い、底辺を広げ、拡充する必要性が生じたので、KULAS 研修を企画し、コンピュータ教育を行うこととした。

KULAS 研修は、当初、情報センターの職員の中から、コンピュータ関連業務の経験が深い者を講師として、スタートした。最初の受講者は7名で、このなかには、5名の女性が含まれている。研修の内容は、プログラムの標準化、コボルのプログラミング、データベース・マネジメント・システムであるADABASの簡易言語NATURALのプログラミングなどで、実際の業務と関連付けたテーマをもとに、原則として、毎週1回午前中

に、約1年間、研修を行った。1987年度は、前年度の受講者を上級コースとし、新たに、初級コースを設けた。受講者は、初級コースが7名で、上級コースが10名であった。初級コースの内容は、端末の操作、プログラムの標準化、コボルのプログラミングなどで、上級コースの内容は、NATURALのプログラミングとシステム設計である。前年度と同様に実際の業務と関連付けたテーマをもとにして行った。1988年度は、受講者の中から、講師を3名選抜した。受講者は、初級コースが9名、上級コースが9名であった。初級コースは、前年と同様に端末の操作、プログラムの標準化、コボルのプログラミングを中心としておこない、上級コースはシステム設計を中心として行った。これまで、3年間の研修において、上級コースを終了した者が17名、初級コースだけを終了した者が8名おり、それぞれの職場でコンピュータ関連業務に携わっている。1年間の研修が終了した時点で、毎年必ず、研修報告書を受講者に

書かせており、受講者は、概ね、研修の成果が上がっており、業務に役立っていることを報告している。研修を企画する側では、これらの報告書をもとに、研修内容の見直しを毎年行っており、研修がより、効果があり、効率的なものになるよう工夫を加えている。

今後、情報センターは、これまでのように図書を収集、整理、提供するだけでなく、新たに、情報を収集、蓄積、提供するという側面がより重要になってくると思われる。そのための手段としてコンピュータは必要欠くべからざるものであろう。従って、そのための要員の養成は、ますます必要となってくると思われる。現在、情報センターの職員の中で、KULAS研修を受けたことのある者が、全体の約1割である。今後、この割合をもっと多くして、新しい情報に対する要求に即座に対応できるよう、KULAS研修を、より一層、充実したものとしていきたいと考えている。

#### 理工学情報センターの寄贈者松下幸之助氏逝く

平成元年4月27日松下電器産業の創立者松下幸之助氏が、94歳の天寿を全うされた。

昭和46年、小金井工学部の日吉復帰の際に新設された理工学情報センターは、故松下氏の全面的なご厚意により成ったもので、氏を記念して松下記念図書館と命名されている。

3階建て方形の端正な建物は、1階及び2階が理工学情報センター（松下記念図書館）で、3階（131m<sup>2</sup>）は情報センター以外の用途に使用されている。松下記念図書館発足当初の規模は、図書収容能力88,000冊、延床面積2,163m<sup>2</sup>（655坪）であったが、蔵書が増えると共に、書

架の増設を行ったこと、特に本年度理工学部50周年に別館書庫が完成したことで、現在は、図書収容能力265,000冊、延床面積2,313m<sup>2</sup>（824坪）に成長している。

矢上台キャンパスで、誰の目にも留まる赤タイルの映える図書館は、開放的な雰囲気、教職員にも学生にも親しまれており、開館以来研究と教育に欠かせないシンボルとなっている。

なお、理工学情報センターでは、7月5日—19日に小展示「理工学情報センター（松下記念図書館）の寄贈者 松下幸之助氏を偲ぶ」を開催して、氏の功績の思い出を新たにした。

## 目録って“〇〇”かしら

石井 真由美

—資質：忍耐強いといわれる。多少被害妄想の気あり。…PS課から本を持った誰かが近づいてくると、即、防御バリアをはる。夢：受入係に「本まだかしら…?」と、空の書架を指して言うこと。—こんな日吉の彼女(和書担当目録係)の日常を1日に凝縮して描いてみると…。

朝、彼女の机の上には、TRC-MARCカードありの本がドドドと壁になって置かれている。まわりを見渡しても壁が乱立。なんとなくみんな壁がないと落ち着かない病に侵されている。おもむろにNDC7版をとりだして分類。頭の標準化、他のメンバーとはもちろんのこと、自己の標準化も大切!…しかし、今日の情報化社会(これ自体NDC8版を折衷して苦しい分類)、発生する様々な概念…“路上観察学…?” etc.をNDCにあてはめて分類するのは難しい。既製の概念についても…然り。NDCにもかなり説明不足、矛盾もあるみたい…自館の適用細則…必要ですネ。「もり君(NDC原編者森清氏)に聞いてみなくちゃ」が、隣の彼女の意見!

「入力お願いします」のあいの手で、端末に向かう。図書館の冊子体目録を作成(研究室は統計用)する為、目録作成(データのあるもの)、オリジナル目録作成、所蔵作成(副本等)の3つに分けて入力。ここでは、最高のネック、オリジナル目録作成について。お利口さん(?)のこの端末は、目録において必須の“書名、著者”等の熟語を1回では出してくれない。だいたいオリジナルになるものは出版年が古い、小さな出版社等、やっかいなものが多い。可変長でないための限界もあるし、図書の記述ワク内で、非図書も入力せねばならない、中国語…簡体字!、韓国語…ハングル!!つい端末に向かう時、大きな独言が多くなってしまふ彼女でした。

入力のノルマを無事(?)終えて、また壁に向かい、今度は副出、標目調整。日本人は国会図書館、外国人はLCの典拠を中心に…実は、これが一番キラいな彼女でした。

午後、一睡魔の刻一目録係新人には、これが一番のつらさかな?目録作業ではアクティブ(?)な仕事タイプ打ちは、午後の仕事と言えるかもしれない。横目に映る研究室の副出カードの山、「あ・あれもタイプせねば…ファ・ファイリングも…」。

と、その時、差し出される除籍届け!「ゲ・これ先月整理したばかりなのに…」単なる本の紛失からバーコードの剥ぎ取り、除籍事由も様々。1冊除籍するのは1冊整理する手間、蔵書の再編成には、積極的除籍が必要であるとは重々承知。でも、目録係にとって、除籍は精神衛生上よくない、と、心の葛藤に暗くなる彼女でした。

Tea・Break, さ、気分転換に非図書でも…え、フロッピーディスク…彼女はさりげなくCDの方を手にとる。うっ、…出版年がわからない“◎…◎…?”このオムニバス、タイトルがない…記述…!NCRに、もう少し具体例が欲しい。しかし、一般教養図書館の内で、図書と非図書資料の目録関係、及び比重って…と、彼女は聞きたくなります。

書架の奥には、多量の中国語と少量だが充分やっかいな韓国語図書。“和風目録”ってツライと思いつつ、そこを離れる。ふと、その時、脳裏をかすめる利用者の影…!目録って自己満足じゃいけない…常に利用者を意識してなくちゃネ。

夕方、さっ、仕上げ。ラベルをタイプして、と。この装備、単純で、一番先に目録作業と切り離せるものだけど、意外にこれが好きって人が多い。彼女もその一人。いわゆる一冊の本を成し遂げたという満足感なのでしょう。

そして、机上には何も残さず帰途につきたいと思いつつ…彼女の毎日は繰り返されるのでした。

目録係って、やっぱり“〇〇”かしら…ネ。

(日吉情報センターテクニカルサービス課)



## KULIC の一年

国 井 佐代子

(三田情報センター整理課)

「KULIC」は慶應義塾大学図書館のPRと図書館職員の研究発表の場という二つの側面を持った年刊雑誌である。執筆者は図書館で働く人達を主に、利用者である先生方や図書館を取り巻く人達（例えば本屋さん）にも登場してもらう。ここでは、図書館に関するトピックや業務の紹介、図書館員としての個人の研究などが話題となる。またその中から、特に注目されているテーマについては特集を組んで重点的に論じるようにしている。

「KULIC」は今号を含めて23号が発刊されているが、その前身である「八角塔」（6号）まで遡ると30年近い歴史を持っている。私はごく最近その編集に携わった者として普段知られていない編集委員の一年の活動を綴ってみようと思う。

1. 反省と企画：KULICは毎年10月か11月に刊行される。新号を刊行後、12月か翌年1月に最初の編集委員会が招集される。ここではまず、前号の反省が行われるが、編集委員にとって生まれたての雑誌は可愛くて、ついひいきめになってしまう。そこで読者である職員や利用者の方達からの批判がとても参考になる。校正に関して言えば“大きな所に落とし穴あり”が教訓であろうか。次号の企画については、テーマのピックアップ程度にとどめられ、3月頃に開かれる2回目の編集委員会で企画の詳細が具体化されていく。そこで編集委員は新しい企画のために、日頃から大学図書館の動向や慶應義塾図書館の中での話題に目を光らせる必要がある。執筆者候補の各センター間のバランスには注意を払うところである。

2. 原稿依頼と下準備：4月末から5月初めにかけて原稿執筆依頼状の発送をおこなう。締切は7月末か8月初めなので、7月に入ると執筆者に確認をとるようにしている。その間編集委員の方

では、巻末に掲載する研究・教育情報センターに関する書誌やスタッフによる論文発表・研究発表の調査を行い原稿を作成する。また、この時期に三田情報センターの選書課を通じて広告の依頼も行う。

3. 割付と仕上げ：8月半ば頃から原稿が集まり始める。雑誌の編集には割付が肝心であるが、それも原稿がそろって初めてできることなので、やはり執筆者の方々にはなるべく早めの提出をお願いしたいと思う。

割付は編集委員の腕の見せどころとっていい作業である。原稿の散らばり、収まり具合、ページ数などに気を配りながら割付、目次を決めていく。そして割付表と原稿を持って印刷所を訪れるのは9月半ば頃になる。

10日程で第一校が刷り上がると校正にかかる。一校の校正は個々の原稿の執筆者にお願いしている。校正済の原稿が戻ってくる間に編集委員の方では、空所に入れる埋め草の原稿の割り出しと収集にとりかかる。埋め草の中には毎年登場するもの（小展示ニュース、三田図書館・情報学会月例会報告）もあるが、その他に誌面にのせきれなかったがその年に話題になった小さなトピック等もある。そのような原稿は、決められたテーマを決められた字数で、しかも短期間に書いてもらうために意外と苦勞する代物である。執筆者の名は誌面に出ないし目立たないが、よくまとまっていて読み応えのあるものもあると思っている。

一校の校正済原稿を印刷所に渡すと二校が上がるのは早く、この校正は編集委員の手で行う。校正のために何度も目を通した原稿をまた新たな目で見つめると、意外な所に誤字、脱字を見つけることもあるので、“校正に完全は無い”という気持ちで取りかかればならぬ。そして、これで良しとなると、表紙の色を選び、印刷・製本にかかってもらう。

こうしてKULICはできあがる。一年に一度であるが、毎年書き続けることが慶應義塾図書館の歴史を記すと同時に、個々の仕事を見つめ直す機会になればと思っている。

資料 I

研究・教育情報センターに関する書誌 1988.8~1989.7

〔研究・教育情報センター〕

清水 龍壺 “パーソナル・ヒストリー・コーナー  
の開設” 三田評論 No. 898, p. 89 (1988)

大出 晃 “写本とインキュナブラのいくつか—慶  
応義塾図書館所蔵書の展示によせて—” 学  
燈 Vol. 85, No. 11, p. 8-11 (1988)

大江 晃 “中世算術書ベスト・セラーの写本” 三  
田評論 No. 897, p. 86-87 (1988)

“過熱?! 図書館WK戦—蔵書数, 施設…追いつ追  
われつ” サンケイ新聞 1989. 4. 7 朝刊 p. 21

〔三田・日吉〕

“学生「ここが疑問」入館方式, 延滞罰則, AV  
施設” 慶應塾生新聞 No. 216, p. 2 (1988.  
9. 10)

“学生諸君, 盗難に御注意 積極的に注意を喚起  
—日吉・三田図書館” 慶應塾生新聞 No. 225  
p. 2 (1989. 7. 10)

〔医学〕

“丸善が「知の倉庫」学術誌図書館を計画” 東  
京新聞 1988. 9. 2 夕刊 p. 3

〔理工学〕

大場 勇治郎 “理工学情報センターの歩み” 慶應  
義塾大学理工学部五十年史 慶應義塾大学理  
工学部編 同学部 p. 221-222 (1989)

森園 繁 “理工学情報センターの近況” 慶應義塾  
大学理工学部報 No. 37, p. 15-16 (1988)

資料 II

スタッフによる論文発表・研究発表 1988.8~1989.7

〔論文発表〕

〔三 田〕

東田全義 “参考調査業務 d. 大学図書館” 図書  
館情報学ハンドブック 同編集委員会編 丸  
善 p. 752-753 (1988)

東田全義 “シスモンディ『政治経済学研究』のも  
う一つの初版?” 日仏図書館研究 No. 14,

p. 5-10 (1988)

東田全義 “トマス・モア著『ユートピア』パー  
セル1518年11月版” 塾 Vol. 26, No. 4, 表  
紙 p. [3] (1988)

東田全義 “慶應義塾大学三田情報センターにお  
ける参考事例から” 日本農学図書館協議会  
会報 No. 71, p. 14-23 (1988)

- 東田全義 “『マラルメ詩集』ブリュッセル1899年”  
**塾** Vol. 27, No. 1, 表紙 p. [3] (1989)
- 樋口恵子 “オープン・ネットワーク” **白書・日本の専門図書館1989—変貌する時代のなかにあつて—** 専門図書館協議会編 同協議会 p. 262-275 (1989)
- 樋口恵子ほか “概念の表現可能性に関するシソーラスの評価—図書館・情報学文献の索引付と実験を通して—” **Library and Information Science** No. 26, p. 103-104 (1988)
- 平尾行蔵 “The descriptive cataloguing of music in Japan” **Fontes artis musicae** Vol. 35, No. 2, p. 80-83 (1988)
- 平尾行蔵 “マルクス・メイボム編訳『古代音楽の創始者』二巻 アムステルダム1652年” **塾** Vol. 26, No. 6, 表紙 p. [3] (1988)
- 広田とし子 “情報資源の整理” **白書・日本の専門図書館1989—変貌する時代のなかにあつて—** 専門図書館協議会編 同協議会 p. 132-139 (1989)
- 細井加奈子 “草双紙改め制度についての一考察—草双紙「改印」の調査を通じて—” **Library and Information Science** No. 26, p. 203-217 (1988)
- 市古健次 “米国図書館協会 (ALA) 第107回大会に出席して” **丸善ライブラリー・ニュース** No. 104, p. 10-11 (1988)
- 市古健次 “3つの視点から見た米国立大学図書館—授業・論文・利用者サービス—” **大学図書館研究** No. 34, p. 41-48 (1989)
- 市古健次 “情報収集戦略” **情報アクセスのすべて** 日本図書館協会編 同協会 p. 158-165 (1989)
- 大橋史子 “日本の図書館の資料保存活動の状況—IFLA「資料保存の原則」に基づく大規模図書館の調査—” **大学図書館研究** No. 34, p. 71-79 (1989)
- 澁川雅俊 “学術情報のシステム化” **現代の高等教育** No. 297, p. 36-40 (1988)
- 澁川雅俊 “光ディスクファイルシステムと資料保存” **第4回日米大学図書館会議 発表論文集** 21 p. (1988)
- 澁川雅俊 “本の倉庫から情報基地へ” **めでいあ** No. 10, p. 2-3 (1989)
- 澁川雅俊 “大学図書館員の人事交流” **図書館雑誌** Vol. 83, No. 2, p. 87-88 (1989)
- 澁川雅俊 “ゲスナー『万有文庫』” **三田評論** No. 900, p. 100-101 (1989)
- 澁川雅俊 “短大図書館に“洋書・洋雑誌”は必要か” **昭和63年度図書館研究協議会集録** p. 1-13 (1989)
- 澁川雅俊 (編著) **平成元年度業務別研修基礎課程テキスト—図書館関係—大学図書館サービスの基本** 日本私立大学連盟 200 p. (1989)
- 澁川雅俊 (津田良成ほか) **図書館情報学ハンドブック** 丸善 1332 p. (1988)
- 白石克 “広重『東海道五十三次』の謎を探る” **The Gold** 1989 No. 8, p. 23-27 (1989)
- 白石克 **広重東海道五十三次八種四百十八景** 小学館 151 p. (1988)
- 山下光雄 “食即是識・宇賀文庫(1) 周禮の話” **日本料理** Vol. 40, No. 12, p. 34-37 (1988)
- 山下光雄 “食即是識・宇賀文庫(2) 高橋氏文の話” **日本料理** Vol. 41, No. 1, p. 30-34 (1989)
- 山下光雄 “食即是識・宇賀文庫(3) 厨事類記” **日本料理** Vol. 41, No. 2, p. 18-21 (1989)
- [医学]
- 後藤敬治 “1989年度 MEDLINE ファイルと MeSH” **JOIS ニュース** No. 54, p. 1-3 (1989)
- 市古みどり “看護における研究と成果の発表の場” **第23回医学図書館員研究集会論文集** p. 163-166 (1988)
- 南野典子 “医学洋書総合目録の現状と今後—医学文献センターの立場として—” **第15回医学図書館員セミナー論文集** p. 106-114 (1988)
- 落合啓一 “Q&A ファクシミリを導入について” **医学図書館** Vol. 35, No. 4, p. 287 (1988)
- 大澤充 **日本医学図書館協会六十年略史** 日本医

学図書館協会将来計画委員会・協会史編纂部  
会編 日本医学図書館協会 350 p. (1989)  
酒井明夫 “私の薦める一冊の本 西岡常一著『木  
に学べ』” 塾監局紀要 No. 15, p. 106 (1988)

〔日 吉〕

加藤好郎 “オーバードクターと学術情報サービ  
スの改善” 現代の図書館 Vol. 26, No. 4,  
p. 238-239 (1988)

〔研究発表〕

〔三 田〕

東田全義 “大学図書館のレファレンス—オンラ  
インと書誌学—” 近畿地区国立大学図書  
館協議会主題別研究集会 1988. 10. 7 於京  
都大学

東田全義 “図書館と西洋稀覯本” 「書物に見る  
西欧哲学・科学思想の流れ」展講演会 1988.  
11. 30 於丸善日本橋店

東田全義 “フランス革命を準備した思想家達の  
éditions originales” 日仏図書館学会総会  
1989. 5. 27 於日仏会館

東田全義 “利用者サービスの課題” 公立大学協  
会図書館協議会研修会 1989. 7. 14 於横浜  
技能会館

樋口恵子 “第4回日米大学図書館会議の風景”  
私立大学図書館協会東地区連絡懇話会 1988.  
10. 21 於北海道工業大学

平尾行蔵 “The descriptive cataloguing of  
music in Japan” International Association  
of Music Libraries, Archives and Docu-  
mentation Centres (IAML) 1988 Tokyo  
Conference 1988. 9. 7 於東京芸術大学

平尾行蔵 “Title structure of Japanese musical  
works” 音楽図書館協議会広島国際会議  
1988. 9. 14 於エリザベト音楽大学

市古健次 “米国大学図書館におけるビブリオグ  
ラフィック・インストラクション” 私立大  
学図書館協会東地区レファレンス分科会夏期  
合宿 1988. 9. 3 於嬉恋

市古健次 “OPAC とコレクション・ディベロ

ップメント” 私立大学図書館協会東地区事  
務能率分科会 1989. 1. 12 於国学院大学  
市古健次 “利用指導—利用案内からビブリオグ  
ラフィック・インストラクションまで—”  
私立大学図書館協会東地区研究部研修部会  
1989. 6. 8 於成蹊大学

長島敏樹 “学術雑誌総合目録データの取り込み  
方法” 私立大学図書館協会東地区逐次刊行  
物分科会 1988. 10. 21 於高千穂商科大学

長島敏樹 “学術情報センターと学術情報の構築を  
めぐって—私立大学図書館接続館の事例—”  
第9回大学図書館研究集会 1988. 11. 24~25  
於法政大学多摩キャンパス

小川治之(ほか) “貸出データに基づく大学図書  
館蔵書における主題分野の特性分析” 第36  
回日本図書館学会研究大会 1988. 10. 6 於北  
海学園大学

澁川雅俊 “学術図書館と洋書・洋雑誌” 東京都  
短期大学図書館協会研究協議会 1988. 9. 12  
於アルカディア市ケ谷

澁川雅俊 “光ディスクファイルシステムと資料保  
存” 第4回日米大学図書館会議 1988. 10. 5  
於ジョンソンファウンデーション・ウィング  
スブレッドセミナーハウス (米国ウィスコン  
シン州ラシース)

澁川雅俊 “資料の保護と保存—第4回日米大学  
図書館会議報告—” 昭和63年度私立大学図  
書館協会東地区懇話会 1988. 10. 21 於北海  
道工業大学

澁川雅俊 “第4回日米大学図書館会議について”  
昭和63年度北海道大学図書館講演会 1988.  
11. 18 於北海道大学

渡部満彦 “相互協力と図書館ネットワーク” 昭  
和63年度大学図書館職員長期研修 1988. 7. 28  
於慶應義塾大学

渡部満彦 “貸出業務の機械化の問題点” 私立大  
学図書館協会東地区研究部研修部会 1988.  
12. 9 於中央大学理工学部校舎

山下光雄 “飲食に関する文献調査の方法” 日本  
栄養士学会 1989. 2. 12 於神田パンセ



〔日 吉〕  
加藤好郎 “カリフォルニア大学バークレー校の

現状と将来” 第1回私立大学図書館協会東  
地区部会研究部会 1989.6.23 於慶應義塾大  
学三田校舎

三田情報センター刊行物の案内

文献シリーズ

No. 19 慶應義塾図書館所蔵寺社境内絵図  
1. 関西編 執筆担当 白石克  
平成元年12月 60 p.

「書物に見る西欧哲学・科学思想の流れ」展  
目録：慶應義塾図書館所蔵稀観本  
慶應義塾図書館編 大江晁監修  
昭和63年11月 82 p.

三田図書館・情報学会 月例研究会

第55回（平成元年1月21日）

「NCR1987年版とコンピュータ・カタログ  
ング」

発表者 牛崎 進（立教大学図書館）

第56回（平成元年3月25日）

「わが国の大学における情報関連研究・教育  
の多様性——『情報』を冠する学部・学科の  
分析を通じて」

発表者 原田隆史，村主朋英（慶應義塾大  
学大学院）

第57回（平成元年6月3日）

「資料保存・保護・保管に関する全国的政策  
——国立国会図書館を中心として」

発表者 高橋和雄（国立国会図書館資料保  
存対策室長）

第58回（平成元年7月15日）

「資料のマイクロ化に関する国際動向」

発表者 山本信男（早稲田大学明治期資料  
マイクロ化事業室）

第59回（平成元年9月30日）

「大学図書館における蔵書評価法」

発表者 逸村 裕（上智大学図書館）  
高山正也（慶應義塾大学）

第60回（平成2年1月20日予定）

「大学図書館における書庫管理の諸問題」

発表者 渡部満彦（慶應義塾大学理工学情  
報センター）

第61回（平成2年3月31日予定）

「MEMEX の概念に基づく研究者用情報蓄  
積・検索システムの総合的研究」

発表者 村主朋英，武者小路澄子，岸田和  
明（慶應義塾大学大学院）

これらの研究会は、非会員にも公開している。  
また、年刊の機関誌 Library and Information  
Science は、個人会費（年額 ¥3,000）、機関会  
費（年額 ¥5,000）を支払った会員に送付される。  
学会への入会、機関誌等に関する問合せは、  
慶應義塾大学図書館・情報学科事務室（Tel. 03  
-453-4511 内線 3147）で受け付けている。

## 年次統計要覧 &lt;昭和63年度&gt;

慶應義塾大学研究・教育情報センター

## I. 図書費 &lt;昭和63年度実績及び平成元年度予算&gt;

内訳 支部センター	63年度実績 <単位:円>			元年度予算 <単位:千円>		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
三田情報センター	619,130,488	3,095,166	622,225,654	630,834	3,726	634,560
図書館	333,892,088	3,095,166	336,987,254	331,052	3,726	334,778
学部*	285,238,400	—	285,239,400	299,782	—	299,782
(私大研究設備相当額)	(21,470,000)	—	**	(21,470)	—	**
日吉情報センター	147,816,118	3,891,362	151,707,480	148,650	2,184	150,834
図書館	57,521,307	2,176,497	59,697,804	57,520	2,184	59,704
学部*	90,294,811	1,714,865	92,009,676	91,130	—	91,130
(私大研究設備相当額)	(7,285,860)	—	**	(7,286)	—	**
医学情報センター	133,498,690	2,797,220	136,295,910	136,496	2,879	139,375
"	133,498,690	2,797,220	136,295,910	136,496	2,879	139,375
理工学情報センター	169,280,300	1,473,370	170,753,670	125,000	1,463	126,463
"	169,280,300	1,473,370	170,753,670	125,000	1,463	126,463
(私大研究設備相当額)	(1,300,000)	—	**	(1,300)	—	**
合  計	1,069,725,596	11,257,118	1,080,982,714	1,040,980	10,252	1,051,232

注) \* 特別図書費は含まず。

\*\* 私大研究設備相当額は合計欄に加算せず。

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時的に手当したもの。

Ⅱ-1 蔵書統計 <年間受入れ及び所蔵冊数>

支部センター	内 訳	単 行 本			製 本 雑 誌			非 図 書 資 料	合 計	
		和	洋	計	和	洋	計			
年 間 受 入 冊 数	三田情報センター	20,244	22,826	43,070	5,802	8,654	14,456	5,966	63,492	
	図 書 館	(11,758)	(11,232)	(22,990)	(2,813)	(1,514)	(4,327)	(2,206)	(29,523)	
	学 部	(8,486)	(11,594)	(20,080)	(2,989)	(7,140)	(10,129)	(3,760)	(33,969)	
	日吉情報センター	14,337	7,323	21,660	2,226	2,465	4,691	712	27,063	
	図 書 館	(11,363)	(1,108)	(12,471)	(1,370)	(151)	(1,521)	(275)	(14,267)	
	学 部	(2,974)	(6,215)	(9,189)	(856)	(2,314)	(3,170)	(437)	(12,796)	
	医学情報センター	1,372	1,780	3,152	1,881	4,645	6,526	98	9,776	
	理工学情報センター	9,363	2,482	11,845	1,433	3,524	4,957	95	16,897	
	合 計	45,316	34,411	79,727	11,342	19,288	30,630	6,871	117,228	
	所 蔵 冊 数 (累 計)	三田情報センター	619,916	644,686	1,264,602	156,792	155,959	312,751	54,404	1,631,757
		図 書 館	(443,854)	(375,587)	(819,441)	(95,131)	(60,496)	(155,627)	(36,063)	(1,011,131)
		学 部	(176,062)	(269,099)	(445,161)	(61,661)	(95,463)	(157,124)	(18,341)	(620,626)
日吉情報センター		243,764	121,365	365,129	27,605	39,021	66,626	7,306	439,061	
図 書 館		(178,135)	(19,436)	(197,571)	(17,377)	(926)	(18,303)	(2,255)	(218,129)	
学 部		(65,629)	(101,929)	(167,558)	(10,228)	(38,095)	(48,323)	(5,051)	(220,932)	
医学情報センター		31,671	34,259	65,930	46,150	93,578	139,728	1,624	207,282	
理工学情報センター		45,857	27,094	72,951	34,782	96,326	131,108	488	204,547	
合 計		941,208	827,404	1,768,612	265,329	384,884	650,213	63,822	2,482,647	

- 注1) 所蔵冊数(累計)は年間受入れ冊数から除籍冊数を引いた数値を前年度の累計所蔵冊数に加えたもの。  
 2) 三田情報センター・学部には図書館・情報学科の製本雑誌を含む。  
 3) 三田情報センターは非図書資料の計上数が昨年度の誤りにより今年度で訂正した為総数が異なっている。  
 4) 日吉情報センターおよび医学情報センターは、転籍があったため、総数が異なっている。

II-2 蔵書統計 <逐次刊行物：タイトル数>

種別 支部センター	カレント			ノンカレント			カレント・ ノンカレント 合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田情報センター 図書館 学部	5,165 (2,080) (3,085)	3,845 (930) (2,915)	9,010 (3,010) (6,000)	5,097 (3,211) (1,886)	2,613 (1,364) (1,249)	7,710 (4,575) (3,135)	16,720 (7,585) (9,135)
日吉情報センター 図書館 学部	927 (525) (402)	737 (46) (691)	1,664 (571) (1,093)	535 (206) (329)	985 (17) (968)	1,520 (223) (1,297)	3,184 (794) (2,390)
医学情報センター	1,286	1,721	3,007	808	1,283	2,091	5,098
理工学情報センター	1,070	1,438	2,508	2,769	4,869	7,638	10,146
合計	8,448	7,741	16,189	9,209	9,750	18,959	35,148

参考データ：非図書資料

支部センター		種別	マイクロ フィルム	マイクロ フィッシュ	CDその他	合計	
年間 新規	三田情報センター	タイトル数	82	45	63	190	
		個数	4,409	1,294	263	5,966	
	日吉情報センター	タイトル数	2	4	300	306	
		個数	65	158	489	712	
	医学情報センター	タイトル数	0	2	64	66	
		個数	0	2	98	100	
	理工学情報センター	タイトル数	0	1	2	3	
		個数	0	43	52	95	
	累 計	三田情報センター	タイトル数	645	166	7,524	8,335
			個数	38,717	3,710	11,977	54,404
日吉情報センター		タイトル数	121	77	2,069	2,267	
		個数	967	577	5,762	7,306	
医学情報センター	タイトル数	0	7	596	603		
	個数	0	7	1,617	1,624		
理工学情報センター	タイトル数	1	17	19	37		
	個数	33	378	77	488		

### Ⅲ-1 利用統計 <貸出及び閲覧冊数>

内 訳 支部センター	館 外 貸 出			館 内 閲 覧		前年度比 館外貸出(計)
	教職員	学 生	計	一般図書	貴重書	
三田情報センター	21,113	132,185	153,298	*	879	1.00
日吉情報センター	5,059	105,182	110,241	*	—	0.97
医学情報センター	49,903	11,745	61,648	*	—	0.95
理工学情報センター	—	—	44,740	*	—	0.79
合 計	—	—	369,927	*	879	0.95

\* 開架のため実数不明。

### Ⅲ-2 利用統計 <相互貸借(複写依頼を含む)>

内 訳 支部センター	依頼を受けた(貸)			依頼した(借)			合 計
	国 内	国 外	計	国 内	国 外	計	
三田情報センター	2,522	3	2,525	1,376	216	1,592	4,117
日吉情報センター	209	0	209	291	67	358	567
医学情報センター	10,567	149	10,716	1,941	122	2,063	12,779
理工学情報センター	33,501	7	33,508	1,608	83	1,691	35,199
合 計	46,799	159	46,958	5,216	488	5,704	52,662

参考データ：早慶ILL

内 訳 支部センター	貸	借
三田情報センター	517	362
日吉情報センター	18	98
医学情報センター	100	0
理工学情報センター	12	317
合 計	647	777

### Ⅲ-3 利 用 統 計 <複写サービス>

内 訳 支部センター	種 別	学 内		学 外		合 計	
		件 数	枚 数	件 数	枚 数	件 数	枚 数
三田情報センター	電子コピー (オペレーター付)	8,652	159,460	2,603	41,374	11,255	200,834
	簡易印刷	163	250,946	—	—	163	250,946
	OHP・スライド作製	49	181	—	—	49	181
	電子コピー (セルフ式)	—	—	—	—	—	1,388,315
	マイクロフィルム	11	6,456	25	7,304	36	13,760
	ファクシミリ	—	—	—	—	1,969 (送信)	2,115 (受信)
日吉情報センター	電子コピー (オペレーター付)	675	4,103	5	67	680	4,170
	電子コピー (セルフ式)	570	244,190	—	—	570	244,190
	マイクロフィルム	18	274	—	—	18	274
医学情報センター	電子コピー (オペレーター付)	53,355	361,377	118,999	675,187	172,334	1,036,564
	OHP・スライド作製	1,520	6,305	—	—	1,520	6,305
	ファクシミリ	—	—	—	—	300 (送信)	980 (受信)
理工学情報センター	電子コピー (オペレーター付)	133	928	33,488	304,970	33,621	305,898
	OHP・スライド作製	34	171	—	—	34	171
	電子コピー (セルフ式)	19,737	313,324	1,155	48,892	20,892	362,216
	マイクロフィルム	54	1,136	0	0	54	1,136

### Ⅲ-4 利 用 統 計 <レファレンス・サービス>

利用者別

内 訳 支部センター	学 内 者		学 外 者	合 計
	教 職 員	学 生		
三田情報センター	2,455	6,679	4,021	13,155
日吉情報センター	2,951	5,171	290	8,412
医学情報センター	2,103	208	2,815	5,126
理工学情報センター	1,286	3,546	1,909	6,741
合 計	8,795	15,604	9,035	33,434

### Ⅲ-4 利用統計 <レファレンス・サービス>

#### 業務内容別

内 訳 支部センター	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合計
三田情報センター	5,988	741	6,352	74	13,155
日吉情報センター	2,644	673	5,083	12	8,412
医学情報センター	2,471	1,809	846	0	5,126
理工学情報センター	4,953	703	956	129	6,741
合 計	16,056	3,926	13,237	215	33,434

### Ⅳ 職 員 数 (平成元.3.31 現在)

センター名	事務員	事務嘱託	学生嘱託	合計
三 田	55	9	14	78
日 吉	24	2	9	35
医 学	20	0	1	21
理 工 学	15	2	2	19
全センター	114	13	26	153

注) 但し、兼務、非常勤嘱託及び夜間(学生嘱託)を含む。

#### 編集後記

情報センターは、来年3月末日で発足満20年となります。当初からここで仕事をし続けてきた者の一人としていま振り返ってみると、実にいろいろなことがありました。二つの新図書館が建設され、業務の機械化が開始され、蔵書が充実されると同時に新しいメディアも導入されるようになりました。その間、研修と業務を通して職員の技能が向上したことも確実です。臆面もなくいうならば、それらによっていま義塾の図書館サービスは、‘日本一’であると思っているところです。

その反面、情報センター発足当初の理想が達成

されたかという、まだまだという思いもあります。それは、この20年図書館サービスの環境が著しく変わり、それにつれて情報センターの目標とするところも拡大してきているからです。新しい環境の下でも‘日本一’の図書館サービスするにはどうすればよいのだろうか。本号の特集「義塾における21世紀の図書館サービス」はそれを皆で考えようというもくろみのひとつです。次号でも、幾人か提案が収載される予定であります。

(澁川雅俊)

編集委員\*情報センター本部 澁川雅俊\*三田情報センター 徳井そのみ 関口素子\*日吉情報センター  
吉川智江\*医学情報センター 永崎由紀子\*理工学情報センター 清野早苗